異世界チェンジリング

空月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界チェンジリング

【Ｎコード】
Ｎ５６７４Ｗ

【作者名】
空月

【あらすじ】
悲痛な声に導かれ、目覚めれば知らない天井が。いかにもファンタジーなこの身体、明らかに自分のじゃないんだけど…って、エルフ？しかも無性体？なんか色々面倒な事情があるみたいだけど、とりあえず旅に出ないといけないらしい。魔法使いと勇者＋αが幼馴染だとか、いったいどこのＲＰＧですか？
――ワケありでハイスペックな魔法使いの身体に憑依トリップ（もどき）した挙句、身体の持ち主の幼馴染と『魔王』を倒すための旅

に出たり何やらややこしい事情に強制的に巻き込まれちゃったりする、平凡だったはずの女の子の物語。

◆別所にて連載中のものの転載です。厳密にはボーイズラブ要素はありませんが、設定上それに近いものが感じられるかもしれません。

前夜

――もう、時間がない。

己の身体に刻まれた忌わしき印を見遣り、嘆息する。闇夜でも煌く銀髪がさらりと肩を滑った。

衣服の袷を元通りにし、静かに立ち上がる。

チャンスは一度。失敗すれば、二度とこの術を使うことは出来ないだろう。そうして無慈悲な運命の輪が廻るのだ。

深く、息を吐いた。指を宙に滑らせると、その軌跡が淡い青の光となって残る。

脳裏に鮮明に在る魔法陣を、寸分の狂いもなく指先で辿る。

これが自分に許された最後の賭けだと知っているから、祈るような気持ちでひたすらに陣を描いた。

そうして最後の連結を成した瞬間、魔法陣は質量を持たない図形から、世界と世界を繋ぐ『門』へと変化し――。

決して交わるはずのない世界が、繋がった。

すまない、と誰かが囁いた。
それはそれは悲痛な声で、聞いてるだけの私ですら妙に胸が痛くなるような、悲哀に満ちた声だった。

『謝って許されることではないのは分かっている。けれど私には他に成す術がない。
住み慣れた地を離れることがどれほどに辛いか、君を慈しむ者達から君を引き離すことがどれほどに罪深いか、それを分かっていて尚、私はこの手段を選んだ。
出来る限りのことはしたつもりだ。それでも足りないことは分かっている。けれどもう猶予はないのだ。
すまない。……本当に、すまない』

……いやなんかよくわかんないけど、そんな今にも罪悪感とかで死にそうになるほどじゃないと思うよ。のっぴきならない理由があるんだろうって言うのは何となく分かるし。
とりあえず衣食住が何とかなれば、人間には適応能力とか順応性とかあるし、住めば都っていう言葉もあることだし、多分大丈夫だよ。根拠ないけど。

『君は、優しい。その優しさを私は利用しようとしている。
……幾らでも罵ってくれて構わない。全ては私と、――私の種族の罪だ。本来なら関わることなく生を終えるはずだった君を巻き込んだ責は負おう。
お願いだ。見捨てないでくれ、私の世界を』

ええええ、いきなり世界とかグローバルなもの出されても困るよ！
こっちは平凡な小市民だよ！？
あ、でも小心者だから罵るとかしないから。っていうか種族って何。まさか人間じゃないんですかあなた。

深い深い、青色の――悔恨を秘めた深海の瞳と、銀色の髪、が。
私の意識に灼きついて、そうしてひとこと。

『チェンジリング』

それが、全ての始まりだった。

はじまりの日

目が覚めたら、知らない天井が見えた。

「ッ！？」

一気に覚醒して身体を起こす。……って、なんか節々が痛い。
怪訝に思って自分の身体を見下ろして、さらに驚いた。

「なに、この服……」

私はいつも通り、パジャマに着替えて寝たはずだ。間違っても裾がひらひらで且つあちこちに細かい刺繍が入ってる――いかにもファンタジーでコスプレチックな服を着た覚えはない。
というか私は床に寝ていたらしい。道理で身体が痛いわけだ。……あれ？

視界の端を掠めた銀色に、思考が止まった。それはさらりと肩を滑り、胸に落ちてくる。いやいや、ちょっと待ってこれはもしかして。

……髪の、毛？

いやいやいやそんなはずは。私髪染めたり脱色したりしてないし。もし染めるとしても銀髪なんて難易度高いのに挑戦したりしない。一歩間違えば白髪じゃないか。

とりあえずその銀色の束を引っ張ってみた。……頭皮が引き攣れる特有の痛みが襲ってくる。思い切り引っ張ったのでちょっと涙目になった。

マジですか。

夢だったりしないだろうかと思いながら自分が寝ていたらしい部屋を見回す。鏡っぽいものを見つけて、それに駆け寄った。

それに映し出されたのは――。

「誰これ……」

胸の中ほどまでの長さの銀髪に、深い青色の瞳。いっそ幻想的なまでの白い肌。初対面だったら「何この美形。神様気合入れすぎ」とでも思いそうなほど整った顔。

そして極めつけは、銀髪の隙間から覗く尖った耳。

ファンタジー小説、もしくはＲＰＧにでも出てきそうなその外見に、私の思考は今度こそ停止した。

けれど幸か不幸か、その瞬間に闖入者は現れた。

「おーい、シーファー？」

どんどん、と扉を叩く音。我に返った私が音の発生源の方を見るのと、その扉が開くのは同時だった。

「ああ、起きてるじゃないか。返事位しろ」

現れたのは金髪碧眼のいかにもな西洋風美形だった。っていうか誰。

「？　どうした。目ぇ開けたまま寝てるとかか？」

反応を示さない私に不思議そうな目線を向けながら、その人はずかずかと部屋に上がりこんで近づいてくる。

「シーファ？」

それが自分に向けられた呼びかけだと気付くのに数秒かかった。馴染みのない名前――けれど私は『知っていた』。

シーファ・イザン。それがこの身体の名前だと。

そう認識した瞬間のことを、どう表せばいいだろう。

知らないはずの記憶、知らないはずの知識、そういうものが奔流のように頭の中に溢れ出てきて、何もかも――『私』そのものが一瞬喪失される感覚。

その感覚から解放され、そうして目の前の人物を認識して私は言葉を零した。

「レアルード……？」

「なんだ？」

知らないはずの人、なのに。私は彼の名を知っていた。間違いなく異常事態に見舞われていることに、今更ながら愕然とする。

そんな私の顔を覗き込む男――『レアルード』。

「具合でも悪いのか？　なんか変だぞ」

前半は見当違いだけど、後半は当たり前だ。だって私はレアルードの知る『シーファ』じゃない。

恐らくは、いや、『シーファ』の記憶からすると確実に、『異世界』の人間である私の精神が『シーファ』の中に入っているのだ。……というか、入れ替わったとでも言うべきか。

まだ記憶が馴染まないためなのか、それとも別の理由があるのか知らないが、所々不明な部分はあるが、私は、起きる前に聞いた悲痛な『声』の主――シーファと精神を交換する形でこの世界に来たらしい。シーファが何故そんなことをしたのかは分からないが、どうすれば帰ることが出来るのかはわかっている――シーファの『記憶』が教えてくれる。

私はそのためにどう行動すべきかを数秒で判断し、口を開いた。

「……すまない。少し、ぼうっとしてしまったようだ」

「疲れてるのか？　今日出発できるか？」

「ああ。……大丈夫だ」

頷いて、立ち上がる。基本的に着物みたいなつくりの服だけじゃなんだか心許なくて（だってこの服結構薄い）近くにかけてあった、これまたひらひらしてる上着を羽織った。

「準備は出来ている。だが少し待っていてくれ。私は起きたばかりなんだ」

「外出ておいたほうが良いか？」

「出来ればそうしてもらえると助かる」

「わかった」

言葉と共にレアルードが外に出て行く。それを見届けて、私は大きく溜息を吐いた。

「……どうしよう」

いや、どうするべきなのかというか、これからの行動指針に関しては分かっているんだけど。

この世界には『魔王』がいるらしい。

……ありえない、と思うけど、異世界だからとりあえず納得しておく。

それで、どうやら『シーファ』は魔王を退治しに行くパーティの一人だったようだ。そしてレアルードもその一人。ゲームとかで言うところの勇者がレアルード、初期メンバーの魔法使いがシーファ、みたいなポジションっぽい。

『魔王』を倒せば元の世界に帰れるのだと、『シーファ』の記憶が告げている。私とシーファの精神を交換する術は、『魔王』を倒すことで解除されるらしい。

『シーファ』の記憶によれば、今日が魔王を倒す旅に出る日で、それ故にレアルードが朝から尋ねてきたということなのかな。……

え、わざわざこの家に？

『シーファ』の記憶と照合して疑問が浮かぶ。だってこの家、レアルードとか他の人とかが住んでいる場所から結構離れた場所、もっと言えば森の中にある。なのにこんな朝っぱらからわざわざ？

それはちょっとおかしくないか？

まあ、パーティがシーファとレアルードだけならまだ分かる。面倒見いい人だなーで済ませられる。でも『シーファ』の記憶から得た知識だと、出発時のメンバーは三人なのだ。

私（シーファ）と、レアルードと、えーと……あれ、名前何だろう。『シーファ』の記憶は私にとって元々のものではないから、『思い出す』という工程になにか不具合でもあるのか、上手く記憶を検索できないのだ。

まあその内思い出せる（この表現が的確かどうかは置いといて）だろうから、とりあえずそれはいいとして。

自分の身体を見下ろす。全てが見慣れない。視線の高さも違う。声も違う。身体のラインも――。

……あれ？

ぺた、と自分の胸に手を押し当てる。……平べったかった。

一度深呼吸してもう一度確かめる。……やっぱり平べったかった。

……え？

もしかして、『シーファ』って――。

即座に閃いた嫌な予感を振り切るように『シーファ』の記憶を辿る。

いやいやいや、百歩譲って身体の交換はいいけど、性転換だけは勘弁……！

ほぼ半泣きで記憶を探る。触って確かめるとか無理。嫌過ぎる。下半身を意識するのも同様の理由で却下だ。

そしてなんとか望んだ記憶を引っ張り出したわけだけど……。

「む、無性体……！？」

思わず床に膝と手をついてうなだれたい衝動に駆られた。やらないけど。

いや、男よりはいいけど…いいけど、無性体って……。

上もないけど下もないってことだよね。……は、排泄器官とかどうなってるんだろう。日常に密接しすぎてて意識しないと記憶（っていうか知識？）が出てこないんだけど。

……まあ、ここで私が何を思おうと事実は変わらないから、この辺のことはありのままに受け止めよう。男性体じゃなかっただけマシだ。

というかあんまり遅いとレアルードがまた突入してくるかもしれない。

シーファが用意しておいた（と記憶が告げている）荷物を手に取る。……異様に軽いんだけど。ちゃんと旅の用意できてるんだろう

か。

ちょっと不安になって中を見てみようかと思ったところで、外からレアルードが大声で呼びかけてきた。ああもう、もうちょっとくらいゆっくりさせてくれないかな…！　一応私いきなりこの世界に連れて来られたばっかりなんだけど！

そんなことレアルードが知るわけもないので、仕方なく扉に向かう。

あ、ちなみに荷物が異様に軽い理由はほぼ四次元ポケットだからだった。そういう『記憶』があった。

でも、つい耳のない猫型ロボットを連想した私を誰も責められないと思う。……実際は魔法の恩恵らしいけど、四次元ポケットって言ったら、ねぇ？

はじまりの日・2

とりあえず滞りなく魔王を倒す旅に出ることが出来た。

ちなみに思い出せなかった旅の仲間三人目はピアという名前の女の子だった。ウェーブのかかった栗色の髪と新緑のような瞳を持つ、可愛らしい、だけどちょっと気が強い感じの女の子。なんだか私…シーファに対して当たりがきついのが玉に瑕だ。

武器は弓。後方支援二人に前衛一人って言うのははたしてバランス的にどうなんだろうかと思わなくも無いけど、どうやらレアルードはかなり強いようなので大丈夫だろう。

よくあるＲＰＧの王道っぽく、まずはちょっと離れた村だか町だかを目指すらしい。そして今現在はその道行きの途中なのだけど。

……なんだろうこの空気の悪さ……！

「リリスの町まではあと一時間くらいだ。このまま休まず行くつもりだけど、大丈夫か？　朝も様子がおかしかったし……」

心配だ、と言う感情を顔全体で表しながら、レアルードが話しかけてくる。それに当たり障りの無い言葉を返しながら、斜め後ろから感じるどう考えても好意的ではない視線について考える。

その視線の持ち主はもちろん私（シーファ）ではないし、レアルードでもない。

ごく簡単な消去法で導き出される結論は、私に内心で首を傾げさせるには充分だ。

シーファの記憶の中に、ピアの情報は殆ど無い。それはつまるところ、ピアとシーファの関わりがあまりなかったことを示す。

シーファの記憶を探ってみても、彼女と会話したのは両の手で足りる程度の回数だった。シーファはあの森の中の家にほぼ引きこもっていたのだから。

そんなシーファにやたらと会いに来ていたのがレアルードで、どう考えても人好きがするとは言えないシーファに対しても嬉々として話しかけ、外に連れ出し、時には家に泊まり込み――そんなレアルードを、シーファは意外と気に入っていたようだ。故に邪険にすることも無く、それなりに仲も良かった、と記憶が告げている。

そしてここからは私の推測なのだけど、ピアはレアルードのことが好きなんじゃないかと思う。なんか私に向けられてる感情って嫉妬っぽいし。

なんで私に嫉妬（シーファ）なんてするのかは疑問だけど。

だってシーファは無性体だけど、どうやら対外的には男で通していたらしいのだ。まあ、胸がない――貧乳とか言ってごまかすのも無理なくらい真っ平らなのだから、女と偽るより男と偽る方が簡単だったのだろう。

どうやらこの世界に無性の人型種族はいないようだし、そもそもシーファはエルフ（この世界においては伝説上の人型種族で、まぁ概ねゲームとか漫画とかに出てくる『エルフ』のイメージで合ってるっぽい）であることも隠しているのだ。

とにかく人間外であることをひた隠しにしていたようなので、男であると思われたところで特に問題もないし、誤解を放置していた

のだろう。

ともかくもレアルードやらピアにとって『男』であるはずの私（シーファ）を、何がどうして恋愛的な嫉妬対象として見ることが出来るのだろうか、ピアは。

まさかレアルードが男色家であるわけもあるまいし。……え、ない、よね？

ちょっぴり不安になりつつも、さらに考えをめぐらす。実際のところ、ピアが嫉妬を向けてくる理由が全く予想できないわけじゃない。しかし、恐らくは理由の大部分を占めるだろう問題は、私にはどうしようもない部類のものだ。

まあいいかと考えを打ち切る。ぎすぎすした雰囲気はちょっと、いやかなり精神に負担がかかるだろうし、視線が気になって仕方がないけど、そのうちどうにかなるだろう。別にシーファとレアルードは特別な関係というわけじゃないのだから。

もしかしたらレアルードとピアが恋人同士になるなんてことがないとも限らない。ＲＰＧのお約束的にも有り得そうだし。なんていったって初期パーティメンバー（仮）だ。

でもそうなると私（シーファ）がお邪魔虫になるなぁ。新しいパーティメンバー早く増えないだろうか。

そんなことを考えつつ、そして度々声をかけてくるレアルードに適当な言葉を返しつつ、歩を進める。

っていうかレアルード、私（シーファ）にばっか声かけてないでピアも気にかけてあげなよ！　女の子なんだし！

……いや、こうもレアルードが心配してくる理由は分かっている。

私が転ぶからだ。

いや別に、私がドジっ子なわけじゃないよ！？

考えてみればすごく単純なことだけど、どうしようもない――恐らく『出来る限りのことをし』てくれたシーファにも、どうすることもできない問題があっただけのこと。

『私』と『シーファ』のリーチが違うのだ。というか全体的に違いすぎる。

『私』よりも長い手足、エルフだからなのかはわからないけれど鋭すぎる五感、すべてが強烈な違和感として私の感覚を混乱させる。

普通に歩こうとすれば長さの違いでつんのめるし、耳が良すぎて音がごちゃごちゃして気持ち悪いし……挙げればキリがないほどの違和感のせいで、顔色悪いし声に力ないしふらふらしてるし時々転びかけるという、到底元気そうには見えない、色々な意味で『様子のおかしい』シーファが出来上がってしまったわけだ。

だからレアルードは私（シーファ）が具合悪いんじゃないかとかなんか無理してるんじゃないかとか思って、気にかけてくれているんだろう。多分。

だけどこればっかりは慣れるしかない。理由言えないし、実践で慣れるのが手っ取り早いだろうし。

まあ、体調悪いんだという風に誤解してるみたいだから都合がいい。多少変な言動しても誤魔化されてくれそうだ。

……ああ、でも私を気にかけるくらいならピアを気にかけてあげ

てくれないかな本当。

善意なのはわかるけど、ただでさえ気を張ってないといけないのに心配そうな目で絶え間なく見られるのはちょっと精神的にキツい……！

何の苦行だろうと言いたくなるような時間を経て、第一の目的地だった『リリスの町』とやらに着いた。

『町』というだけあって、レアルード達が暮らしていた村よりも大きいし、道も整備されている。石造りの建物と木造りの建物が混在していて、やっぱりどこかファンタジーっぽい。

普段だったら絶対におのぼりさんの如くきょろきょろうろうろする自信があるけど、今現在の体調と状況的にそうできなかったのは良かったのか悪かったのか。

既に限界ギリギリだった私を見兼ねてか、ものすごく迅速にレアルードが宿をとってきてくれた。

ピアの視線が痛いけどものすごく有難いよレアルード……！　今ならハグで感謝を表したって良い。……いや、単にそろそろ歩くの辛いだけです。寄りかかりたい。でもピアが怖いからやらないでおく。

幽霊さながらな感じでふらふらと宿に向かう。よっぽど死にそうな顔色だったのか、途中でレアルードが肩を貸してくれた。視線に殺傷能力があったら十回くらい惨殺されてそうな視線をピアから受けたけど、拒否できるほどの余裕はもうなかったので厚意に甘えさ

せてもらった。

っていうかありえないよこの頭痛と吐き気。鋭敏すぎる五感には早く慣れないとまずそうだ。正直ここまで影響が出るとは思わなかった。

辿り着いた宿の一室でベッドに寝転がる。なおも心配そうなレアルードと射殺しそうな視線を放つピアをなんとか言いくるめて部屋から追い出し、溜息を吐く。

目を閉じてすぐに、夢に落ちた。

目の前に鏡があった。そこにはすごく申し訳なさそうな顔をした『シーファ』が映っていて、彼は口を開いて何か言う。だけどその言葉は聞こえなくて、私は首を傾げた。

しばらく何かを言い続けていたシーファは諦めたように首を振る。そしてシーファが空中に魔法陣みたいなのを書いて、それがふわりと私の方に移動してきて――。

ちょうど私の心臓の真上に触れたところで、目が覚めた。

「変な夢……」

呟いて、どのくらい眠っていたのだろうと窓の外を見る。町に着いたときはちょうどお昼時だったはずだから、多分一時間も経って

いないだろう。多分レアルードとピアはご飯でも食べてるだろうし、もう少しこうしていよう。

……あ、でもこれ一応旅装なんだから着替えた方がいいのかな。なんか部屋着的なものくらい荷物の中にあるだろうし。

ベッドから降りて荷物を探る。難なく見つかった部屋着っぽいものに着替えようと袷を解いて、目に入ったものの異様さに凍りついた。

殆ど上半身全体に及ぶ、全体像を把握できない複雑な文様。そして心臓の真上に、それより小さな、夢で見たのと同じ魔法陣らしきものがあった。

「なに、これ……」

指先で辿ってみてもそこにはただ肌の質感があるだけで、それがむしろ異様さを際立たせていた。

大きい方の文様――恐らくはこちらも魔法陣のような形状なのだろう――は黒色で、だけどうっすらと赤く発光していた。小さな魔法陣の方は淡く青色に光っている。

青色の魔法陣はしばらく鼓動に合わせるように明滅していたけど、じっと見ている間にすうっと身体に溶けるように消えた。同時に黒色の文様の発光もおさまる。

気付けば眠る前まで感じていた違和感の全てが跡形もなく消えていて、頭痛と吐き気も感じなくなっていた。

それが青色の魔法陣のおかげだということは何となく分かったので、とりあえず袷を元に戻す。そしてしばらく悩んだ後に、少し外に出てみることにした。

まだレアルード達が帰ってくる様子はないし、一応書き置きでもしておけばいいだろう。それに色々確かめたいこともある。

荷物の中にあったメモ用紙っぽいものに少し出かけてくる旨を書き綴り、部屋に備え付けらしいテーブルの上に載せて、荷物を持って宿を出た。

ちなみに、この世界の文字は私が知っているどの言語とも違うものだった。とりあえず絶対に日本語ではない。だけど、誰かに伝える目的で文字を書こうとすると手が勝手にこの世界の言語に置き換えて書いてくれるので、伝わらないということはないだろう。

『シーファ』が何かしてくれたんだと思うけど、自分の意思の外で手が文字を綴るのは、ちょっと気味悪かった。便利だけど。

第一次接近遭遇

シーファの使う『魔法』は、『世界干渉力』によって発動する。

『世界干渉力』が一体何なのかは私にはさっぱりわからないのだけど、とりあえずその名の通りの代物であるらしい。

『世界』に対して『干渉』する力。例えば火種も道具も何もない状況で、灯りのための火をおこそうとしても無理だけど、その『無理』を『世界』を変化させることによって実現させる力、だと思う。

灯りの例で言えば、そこに炎があるのだと『世界』に認識させることによって炎を生み出す、みたいな。

まあ、まだわからない部分が多い。『シーファ』の記憶だけでは心許ないので、実地でその辺は理解しようと思ったのだけど。

「えーと、とりあえず……『呪』と『魔法陣』があると、制御しやすいのかな」

確認するようにひとりごちて、極めて初歩的な『呪』と『魔法陣』を記憶から探る。

炎とか水とか氷とか風とか、ＲＰＧで見るような属性持ちの攻撃は一通りあるようだ。もちろん回復系統とか防御系統のものもある。

少し悩んでから、まずは攻撃魔法を試してみることにする。これから『魔王』を倒しに行くのだし、どういうものか知っておかない

とまずいだろう。

宿の裏手の空き地っぽいところにとりあえず来てみたのだけど、うっかり人に見られても困るので、『シーファ』の記憶にあった『結界』を張ってみようと決めた。近くに生えていた木の幹に荷物の中にあった札らしきものを貼って、そこに『世界干渉力』を浸透させる。

途端、遠く聞こえていた喧騒や人の話し声がぷつりと途切れた。どうやら『結界』を張るのに成功したようだ。

よし、と気合を入れなおして、私は『シーファ』の記憶にある『魔法』を簡単なものから実践し始めた。

眼前に広がる巨大な氷の壁――否、氷の盾を消滅させて、私は溜息を吐いた。

「一体いくつあるんだろう、魔法……」

周囲に被害を及ぼさないように、宙に向かって攻撃を放ってみたり、防御系の魔法を展開してそれに攻撃魔法を当ててみたり、身体補助系の魔法を自分にかけてからその効果を確かめてみたり……各系統ごとでも両手じゃ足りないくらいの魔法を試したはずなのに、『シーファ』の記憶からは次から次へと『魔法』が出てくる。

流石に広範囲系の魔法は怖いので試していないのだけど、『シーファ』はなんでこんなに多くの魔法を知ってるんだろう。

『魔法』ってそこまで一般的なものじゃないみたいだし、『魔法

全集』的な本があるわけでもない。
……自分で作ったとかだろうか。そういうことが出来るのかは知らないけど。

『シーファ』にとってこれらの魔法を知っていることは『当然』であるらしいので、まあ、理由を知らなくてもそこまで困ったことにはならないだろう。その内分かるときが来るかもしれないし。

あんまり長々とここで『魔法』について確認しているわけにもいかない。正確な時間はわからないけど、そろそろレアルード達が帰ってきてもおかしくない時間だろう。一応書き置きはしてきてるけど、なんかレアルードって心配性っぽい気がするからなぁ。

とか何とか考えて、最後に回復系統の魔法を試してみようと『記憶』を探った。

回復系も他の魔法と同じで、範囲とか威力で段階が分かれている。……違うな、分かれているというよりも、その方が使うのに便利だからそうしてるっぽい。とりあえず使いやすいように区切りをつけておいてるみたいな……上手く言えないけど。
まあとにかく、威力も範囲も中程度の回復系魔法を『記憶』から引っ張り出して、私はそれを発動させるための魔法陣を宙に描いた。
『記憶』の中の魔法陣を想起すれば、指先は独りでにその図形を生み出す。自分の意思の外で身体が動く現象には、多分もう慣れるしかないんだろう。
……やっぱり気味悪い、ていうか気持ち悪いけど。

別に魔法陣を描かなくてもいいんだけど、暫くは魔法陣と呪ありで魔法を使うことにしようと思っている。まあ、そうする余裕があるときに限るだろうとは思うけど。

だって切羽詰ってるときにいちいち魔法陣とか描いてられない。魔法陣を自分で描かずそのまま出現させることも出来るらしいから、そっちもその内やってみよう。

ぼんやりそんなことを思ってる間に魔法陣を描き終わったので、呪を紡ぐために小さく口を開いた。

『呪』は明確に決まってるわけではなく（まあそう言ったら『魔法陣』も絶対的な形状があるわけじゃないみたいだけど）、『私』がそれをその『魔法』が発動するためのキーみたいなものだと認識していればそれでいいらしい。

『シーファ』の『呪』ももちろんあったんだけど、なんかちょっと……『私』が口にするのは難しいというか恥ずかしいというか、……いかにも『魔法使い』な『呪』だったのだ。

だから別に『呪』を決めることにしたのだけど、ある程度それっぽくて、且つあんまり恥ずかしくない『呪』というと結構限られてくるわけで。自分のセンスに絶望的な気分になるけど、これはもう仕方ないと思う。

「――『ヒール』」

呟けば、宙に浮いていた魔法陣が一瞬で光の粒子に変化し、ぱっと周囲に拡散した。次いで私を中心として地面に巨大な魔法陣が現れる。

大きさは空き地（？）より少し小さい程度だ。魔法陣の範囲が魔法の効果範囲だろうから、結構範囲が広い気がする。

……それにしても、果たしてこの視覚効果は何か意味があるんだ

ろうか。ＲＰＧ的エフェクトにも程がある。最初から大きい魔法陣が展開すればいいと思うんだよね。せめて光の粒子っぽいエフェクトがなければ発動までの時間短縮にもなると思うんだけど。

そんなどうでもよさそうなことを考えていたからだろうか、回復系の魔法――便宜上『ヒール』と呼ぶことにする――が発動すると共に広がった光景に、私は即座に反応できなかった。

目の前に広がる大量の緑と、そこかしこに散らばる赤やら白やらピンクやら紫やら――色の洪水といっても過言ではないそれはどこからどう見ても。

「花……？」

それ以外の何物でもなかった。

さっきまでは踝ほどまでしかなかった雑草その他は膝辺りにまで伸びて、そこかしこで影も形も見当たらなかった花が咲いている。ぽつぽつ立ってた木にも青々とした葉が茂り、花だけじゃなく実までつけている始末だ。

明らかに、異常。

原因が何なのか――なんて、考えるまでもなく分かる。

……やってしまった……！

植物にも『ヒール』って効くんだ？！　……あれ、でも『シーファ』の記憶だとこういう現象起こったことないみたいだったのに。それ以前に『ヒール』って回復魔法じゃないの！？　なんで花が咲くの！？

ええと、そうだ、とりあえずこれどうにかしないと。そのままにしてたら何の怪奇現象だって感じだし。ああでも抜いたり枯らしたりするわけにもいかないよね。

おろおろとしながら解決策を模索する。しかし良い案は思いつかない。

と、そのとき。

「わーあ絶景ー」

ぱちぱちぱち、と気の抜ける拍手と共に聞こえてきた声に、ぎくりと肩を強張らせた。

声のした方を振り返れば、見知らぬ人間がこちらを見て笑みを浮かべている。

「……誰だ」

「通りすがりの謎の剣士ー……いやいや冗談だからそう剣呑な目ェしなさんな。お綺麗な顔が台無しよ？」

「誰だ」

「うっわー丸無視かい。……あーはいはいちゃんと答えますって。オレはタキ。旅人ってか剣士？」

いっそわざとらしいくらいに軽い口調と仕草。目に鮮やかな赤い髪と、内面を窺わせない金色の瞳。均整の取れた身体つきと隙のなさは、彼が佩いている剣が飾りではないことを示している。

警戒を強めて見つめれば、「おー、怖い怖い」と肩を竦めた。絶対おちょくってるよねこの人。

もしかして魔法使ってるとこ見られた？　っていうかなんでこの人結界内にいるわけ！？

結界の要である札に目を走らせる。……異常はない。結界に揺らぎもないし、きちんとその役目を果たしているようだ。

と、いうことは。

「……無効化か」

『シーファ』の記憶によると、特定の条件を満たすことで『魔法』を無効化できる人間が稀にいるらしい。この男は恐らくそれなのだろう。

「ご名答〜。……ところで訊きたいことがあるんだけど」

こちらに向かって歩きながら男が言う。だけど答える義理なんてないので無言を貫く。

それに気を悪くした様子もなく、男――えーと、タキさん？　……もういいや、呼び捨てで。タキはさらに近づいてきたかと思うと、唐突に手を伸ばしてきて。

「アンタさ、何隠してんの？」

『シーファ』の、さらさらとした長い銀髪を手にとって、息がかかるほどの近距離でにやりと笑う。

――…まずい！

よくわからない衝動に従って、無理矢理に距離をとる。少し髪をひっぱられる形になったので痛かったけど、優先すべきはタキから離れることだったから仕方ない。

「逃げられちゃった」

残念、と笑うその目は未だに獲物を狙う獣を髣髴とさせる。気は

抜けない。
今タキに近づかれるのはまずい。何故なのか、明確にはわからないけど。ただ、頭の中で絶えず警鐘が鳴っているのだ。
そして同時に湧き上がるのは、疑問。

（何故ここに、）

『私』じゃない。『シーファ』の、――記憶？

（タキに逢うのはもっと後のはずなのに――）

まるで映画のコマ送りみたいに、断片的な映像が脳裏に閃く。
『シーファ』とピアとレアルード。盗賊に荒らされる村と、連れ去られる女達。レアルードに縋り付く老婆。盗賊の根城。捕まったピアと、『シーファ』に下衆な視線を向けてくる男。悔しげに歯噛みするレアルード。地面に落とされた剣と、同時に発動した魔法。怒りに瞳をぎらぎらとさせながら『シーファ』の喉元に剣を向ける盗賊の首領。皮一枚分切り裂かれて流れた赤と、吹き飛ばされた首領の姿。剣を納めながら振り向いた赤髪と金瞳の――。

それは、『シーファ』にとっての、過ぎ去った『未来』。
あるはずのない、『記憶』だった。

第一次接近遭遇・2

現実のものでない映像が途切れる。それを見ていた時間は瞬きに等しいほど短かったはずなのに、とても長い時間に感じた。

視界の中でタキがこちらに再度手を伸ばしてきたのを見て、後退る。まだ視界が定まらない。夢の中にいるみたいにふわふわする。

頭の中に浮かんできた魔法陣を顕現させ、小さく呪を紡いだ。一時しのぎだけどやらないよりましだ。

伸ばされた手が静電気にでも触れたかのように弾かれる。タキが楽しげに笑みを深めた。

「へえ、やるじゃんアンタ。そこまでして隠そうとしてること、気になるなー」

『隠している』……そう、隠しているのだ。『シーファ』がほぼ恒久的に展開させている『魔法』――幻術によって隠されているのは、エルフの特徴。尖った耳を見られれば即座に人外であることがばれるから、『シーファ』はそれを隠した。

幻術は一度でも破られれば、同じものは効かなくなるらしい。今ここでタキに幻術を無効化されると、確実にエルフだとばれる。

『今ここで』ばれるのはまずい、と『記憶』が告げる。

なんなんだろうこれは。『シーファ』は思っていた以上に面倒くさい……じゃなかった、複雑な身の上だったらしい。

とにかく一旦タキから逃げればいいんだろうか。とはいえこの状況で何をどうすれば逃れられるんだろう。流石に人間に向かって強力な魔法を使うのは嫌なんだけど。そもそもタキは魔法無効化できるようだし。

これぞ袋小路？　八方塞？　どうすればいいんだろう本当に。

とりあえず結界を解除しよう。ここはいわば隔絶空間になってるから、そのままだと他の人の介入も期待できないし。

札に向かって物質を消滅させる魔法を放つ。作成者＝シーファ（私）の意思の元で放たれた攻撃だから、何の抵抗もなく届いた。ぱっと塵一つ残さず札が消え去る。

……この魔法、生物に向かって使えるとしたらものすごい凶悪だよね……。『記憶』からすると使えないこともないっぽいのが怖い。『シーファ』、使ったことあるのか……。

札が消滅すると同時に結界が解け、音が戻ってくる。鳥のさえずりとか人のざわめきとかそういうの。宿の食堂からだろう、食べ物の匂いも漂ってきて、そういえばお腹すいてるなーとか思った。

いや、それどころじゃないんだけどね？

結界がなくなったことにも頓着せず、タキは底の見えない笑顔でこっちを窺っているし。ちょっとでも隙を見せたら襲い掛かられそ

うだ。鷹とか豹とかそんな感じで。

方や笑顔、方や無表情で睨みあう。体感的には三十分位経った気がしたけど、せいぜい一分か二分くらいだろう。……精神力のポイント（ゲームのＨＰみたいなの）とかあったらガリガリ削れてるよ絶対。

どうにもこうにも仕様がない膠着状態を打破したのは、意外な人物の登場だった。

「……っシーファ！」

声と共に唐突に白銀が閃いて、タキが後方に飛び退った。急いで駆けつけたんだろう、少し乱れた金髪。『シーファ』を庇うように立ったその手には抜き身の剣が握られている。

「レアルード……？」

なんでここに。

「ナイトのご登場〜、ってか？」

ふざけた調子でタキが言うと、レアルードの纏う空気が鋭さを増した。……ていうかこれは明らかに殺気放ってるよね！？　なんで

！？

まあ傍から見て『シーファ』とタキが仲良しこよしに見えなかったのは確かだろうけど、殺気まで放つことはないよね？　牽制なら最初の一閃で充分だったはずだし。

そんなにタキが危険そうに見えたのかな……警戒はしてたものの生命の危機は全然感じなかったんだけど。

だって。

「レアルード、剣をしまえ」

どうしてだ、と言いたげな瞳をレアルードが向けてくる。それでもタキに対して警戒を怠らないのはすごいなぁ。意外とレアルードって戦い慣れしてる？

「殺気を向けるような相手じゃない」

言ってから、なんかこれじゃタキが雑魚だって言ってるようにも聞こえるよね、と気付いたけど、幸いにもタキもレアルードもちゃんと私の言いたいことを汲み取ってくれたみたいで、怪訝そうな表情になった。

さて、どう説明すべきか。

『シーファ』の記憶から分かったのは、タキは後々仲間になる人材だってことだ。

二人に本気で戦われるのは困る。人間関係に響くかもだし。

何故なのかはまだ分からないが、『シーファ』はこの『旅』を一度どころか何度も繰り返しているらしい。『ループ』してるのだと言ってもいい。

だからこの『旅』の最中に起こることの『記憶』がある。だけど『私』が『シーファ』の身体に入ったことで本来の『シーファ』がしない行動をしてしまったために、『シーファ』の予期しない出来事――今ここでタキに出会うこと――が起こってしまった。

どこまで『シーファ』が辿るはずだった（あるいは辿った）道筋を外れていいのかがわからないので、洗いざらい喋ってしまうわけにもいかない。というかそんなことしたらただの頭のおかしい人だ。

とりあえずうやむやにしちゃえばいいか。

「どう見えたのかは知らないが、彼は私に危害を加えようとしたわけじゃない。触れられそうになったのに、私が過剰反応してしまっただけだ」

一応、事実だ。実際タキは私を傷つける意思はなかったはずだし。

「じゃあどうして結界なんて張ってたんだ」

「少し一人で考えたいことがあって、」

「だったら別に部屋の中でも良かったんじゃないのか」

「外の空気を吸いたい気分だったんだ」

なんか糾弾されてるような気がするんですが。雰囲気が怖いよレアルード。

「なんで俺が戻るまで待たなかった？　この男がそうじゃないとしても、他の誰かに襲われる可能性だってあっただろう。お前は体調を崩していたんだし」

「だから出るのは宿の敷地内のみに留めていたんだ。……そういえばレアルード、ピアは」

レアルードと一緒に行動しているはずのピアの姿が見えないと思って問いかければ、レアルードは「そんなことはどうでもいい」と言い放った。

え、ちょ、それはないだろうレアルード。ピアは弓術が使えるとはいっても女の子なわけで。そしてこの町は比較的治安が良い方だとはいえ、素行の悪い人々もいるわけで。というか曲がりなりにもパーティメンバーに対して『そんなこと』って……！

「いや、どうでも良くはないだろう。ピアはどこにいるんだ。宿の中か？」

それなら安心なんだけど、と希望的観測をもって訊いたのに、レアルードは表情すら変えずに「さあ」と言った。

「お前が魔法を使ったのを感じ取ってすぐここに向かったから……最後にいたのは雑貨屋だと思うが」

曖昧な言い方だ。きっと、殆どピアに意識を向けてなかったに違いない。……あんまりそう思いたくないけど、もしかしたら『シーファ』のことを心配していたからかもしれない。

多分、結界を解いたことで『魔法』の残滓を感じ取ったんだろう。レアルードは人の心の機微には鈍そうだけど、戦いに関することには鋭そうだ。

っていうか鈍いにも程があると思うんだ、レアルード。絶対ピアはレアルードと二人きりで喜んでただろうに。空気読もうよ。

「もしもーし、お二人さん？」

不意にかかった声に、はっとする。ちょっと存在忘れかけてた。

「何だ。用がないのなら去れ。用があっても去れ」

先に言葉を返したのはレアルードだった。っていうか、あの、も

のすごい敵意を感じるんですが。用があっても去れってそんな。

「うわ、警戒心バリバリだなアンタ。……なあ、アンタ達旅人だろ？　話し聞いてる限り三人組の」

「……」

レアルードは無言だ。さっさと消えろと言わんばかりの雰囲気だ。でもタキは全く気にする様子もなく言葉を続ける。

「一人は女だろ。で、そこの美人さんは魔法使い。アンタは剣士だな？」

にこにこ、というよりにやにやと笑うタキ。一体何が言いたいんだろうか。

「オレは一応剣士なんだけど、――オレを仲間に加える気、ない？」

交渉→説得

タキの提案を聞いた瞬間に踵を返して宿に戻ろうとしたレアルードを何とか説得して、話し合いの場を設けた、のはいいんだけど……。

宿の一階のレストラン――というか軽食屋と言うか、とりあえずアットホームな感じの食事処の片隅。周囲からは食事時の楽しげなざわめきが聞こえてきているけど、私達のいるテーブルには残念ながら和やかさはかけらも存在しない。

正面にはにこにこ、というよりにやにやと笑うタキ。隣にはむっつりと押し黙って不機嫌さを隠そうともしないレアルード。

ぶっちゃけ超空気悪い……！

いやまあ、初対面の様子からしてこうなることはわかってたんだけど。

そこをどうにかして話す空気に持って行かなきゃいけないんだけど、とりあえずレアルードにそれを求めるのはなかなか無理難題そうな気がする。もう諦めちゃっていいかな。

「――タキ、だったか」

「うん？」

タキに話しかけた途端、横から視線が突き刺さる。痛い痛いそんな非難を込めた目で見ないで下さいレアルード。

なんでここまで敵対心（？）芽生えちゃったのかな。幾ら第一印象悪かったからってここまであからさまにはならないと思うんだけど。

そもそもレアルード、『シーファ』の記憶からすると好悪を率直に表に出すタイプじゃなかったっぽい、というか好悪自体そんなに強く抱かないタイプだったっぽいのに……。

それはともかく、さくさく話を進めることにする。できればタキの唐突発言の真意を探りたいところだけど、どうかなー。タキ、真意とか隠すの上手そう――っていうか『シーファ』の記憶からして間違いなく上手いし。何気に腹芸担当だったっぽい『記憶』が……。

「仲間に入れる気はないか、と先程言っていたが、何故いきなりそんなことを？」

切り出し方を考えるのも面倒になって、ストレートに尋ねてみる。タキはちょっと目を見開いて、それから楽しげに笑みを深めた。

「そりゃ、なんか面白そうだったから」

「……それだけか」

……うん、『記憶』にある通りのレアルードの動機そのままだ。言われる場所が変わっただけで、何にも変わってない。

「ああ――」

何か思いついたみたいに金色の瞳が煌めく。……あ、デジャヴ。

「アンタに興味が湧いたから、ってのもあるぜ？」

みしべきばきっ、と不穏な音が隣からした。そっと視線を向けると、木製のテーブルがひび割れて一部粉砕された上陥没していた。ちょうど、レアルードが手を置いていた辺りだ。……素手で粉砕圧縮って、恐っ……！

視線を上げてレアルードの様子を窺えば、背筋が凍りそうな迫力のある無表情でタキを睨んでいた。なんかいろいろ臨界点突破したらしい。宥められる気が万が一にもしないんだけどどうしよう。

ひとまずタキの発言を放置するわけにもいかないので、言葉を返しておく。

って言っても、『シーファ』の『記憶』通りに返すしかないんだけど。

「……そうか」

リアクション薄いなぁ、って自分で思わないでもないけど仕方ない。
実はこのやり取り、そのまま『シーファ』の『記憶』にあるんだよねぇ。つまりこれは『シーファ』が繰り返した『旅』における不可避イベントなわけで。多分よっぽどアレな返答をしない限りは――タキは仲間になるのが確定している、と言ってもいいわけで。場所と状況が変わったからって、道筋が大きく変わるようなことはないんだろう、多分。

……まあ、ここまでタキとレアルードの間の雰囲気が険悪だったことは『シーファ』の記憶にもなかったけど。多少の警戒とか不審はあれど、今みたいにほぼ敵認定とかはさすがに。
どうしてこうなっちゃったかな……、いやわかってる。『私』がイレギュラーな動きしたからだよね。だから多少の苦労とか精神的ストレスは甘んじて受けるべきですよねー……。

「――レアルード」

呼びかけると、纏っていた底冷えるような空気を霧散させたレアルードが、なんか犬が高速で尻尾振ってる幻覚が見える勢いでこっちを見た。
……『シーファ』、一体どういう風にレアルードに接してたんだろう。なんか刷り込みとかそれ系のレベルで懐かれてない？

「彼の申し出だが、私個人としては受けた方が後々のためになると思う。彼は当人の申告通り剣士のようだし、珍しい『魔法の無効化』の能力も持っているようだ。それに、今のままだと戦闘時のバラン

スが悪いのは以前にも言っただろう。一時的にでも前衛が増えることは、これからのことを考えても良い方向に働くはずだ」

長々と（『シーファ』にしては）言い連ねたけど、これもまた『記憶』にある『シーファ』の言葉だ。ほぼ初対面で仲間に入れないかって聞いてくるのがタキの常だったので、毎回『シーファ』はこんなふうにレアルードに提言していた。

……でもやっぱり、今回はレアルードの反応が悪い。いつもの――『シーファ』の記憶における――やりとりだと、この辺でタキのパーティ加入が決定するんだけど。

どことなく不満そうに唇を引き結ぶレアルードに、今度は『私』の意見を付け加えて言ってみる。

「レアルード。君の強さは知っているが、だからと言って、前衛の負担が君一人に集中する状態は良くない。彼は物言いこそ真剣味に欠けるし、軽薄そうな印象も拭えないが――」

「ちょい待て美人さん、それは酷ぇだろ」

「自分の言動を顧みてからそういう台詞は口に出した方がいいと思うが」

「……容赦ねぇなー」

茶々を入れてきたタキは、別に気を悪くしたとかではないらしい。浮かべた苦笑は表面だけのことらしく、成り行きを興味津々で見守っているのがありありと分かる。

放っておいても全然大丈夫そうなので、再びレアルードに向き直る。

「彼の剣士としての腕は、私よりも君の方がよく分かるはずだ。ならば、彼が加わることの有益性も分かると思う。何も、君だけでは不安というわけではない。ただ、この旅に更なる安全を求めるならば、彼の申し出は願ってもいないものだというだけだ。それに――」

言おうか言うまいかちょっと悩む。だけど、『私』だけじゃなく『シーファ』も思ってたことだったので、言ってしまうことにした。

「出来るだけ、皆が怪我をする可能性を減らしたい。君が傷つくのは、あまり見たいものじゃない」

言った瞬間、レアルードはきょとんとした。美形は多少の間抜け面すらカバーするのか、と感心してるうちに、みるみる赤くなっていく。……なんで？

前衛故にやたらめったら怪我をするレアルード（『旅』が進むごとに怪我の程度もレベルアップしていくんだよね、『記憶』によると。本当見たくない。いろんな意味で）だからこその台詞だったんだけど……。

反応に納得いかないけど、何やら意見を受け入れてもらえそうな雰囲気なので、畳み掛ける。

「無理にとは言わないが、彼――タキを仲間に加えてみないか」

説得にはまず目線を合わせないと、と思ってじっと見てたのに、レアルードは何だか慌てたみたいに視線を逸らした。

そのまま微妙な沈黙が続くこと、数十秒の後。

「……。……シーファが、そう言うなら」

頬を赤くして相変わらず視線を逸らしつつ、渋々って感じの態度を崩さずに言ったレアルードに、「どこのツンデレですかあなた」と思ったのは致し方ないことだと思う。うん。

……あと正直言って、わりとガタイの良い西洋風美形の赤面顔って、色々微妙です。

合流

なんとか話纏まってよかったなぁ、でもなんか忘れてるような、とか思ってた、ら。

「やっと見つけたっ」

ちょっと非難がましい響きを含みながらも可愛さが溢れるような声と、視界を過ぎったふわふわとした栗色の髪。
私を押しのける勢いでレアルードに抱きついた……飛びついた？
彼女を見て、忘れてた何かを思い出した。っていうかタキが仲間に入れないかとか言い出す前はそれについて話してたんだった。

そうだよレアルードがピアを放置してこっちに来てたんだ……！

「レアルード、いつの間にかいなくなっちゃってるんだもん。びっくりして探し回っちゃった」

ピアは座る私（シーファ）とレアルードの間に割り込むような形になってるので表情は見えないけど、どういう顔してるのか想像できる声音と台詞だ。
とりあえず危ない目とかには遭わなかったみたいで良かった。私（シーファ）のせいで（って言ってもいいよねこの場合。不本意だけど）そんな

ことになったらものすごく寝覚めが悪いし。

明らかにピアはレアルードしか見ていない、つまり二人の世界作ってるも同然なので、ひとまずそっちは意識から切り離す。デバガメの趣味はない。

正面のタキに視線を向ければ、何故か探るような目でじっと見られてた。凝視。穴が開くレベルで。

……あああそうだったそもそもタキって『シーファ』が隠してることを暴きたがってたんだっけ？！

多分これからはさっきみたいに実力行使に出ることはないと思うし、レアルードを防波堤代わりにすればどうにかこうにかそれなりに誤魔化せるらしいっていうのは『シーファ』の記憶からも分かるんだけど。

でもそうしちゃうと、現段階でもよろしくないピアとの関係が更にこじれそうだなぁ……これまでの『シーファ』はその辺どうやって回避してたんだろう。なんかピア関連ってあんまり思い出せないんだよね。謎。

存在を忘れかけてた飲み物（なんか果実っぽい味）を飲みつつタキの視線を受け止める。

こう見るとタキって微妙に浮いた色彩してるなー。いやこの『世界』はそれはもう色とりどり、色彩豊かすぎるくらい髪の色も目の色もカラフルな人がたくさんいるみたいなんだけど。ピンクとか緑とか、地毛とは思えない——少なくとも『私』の居た世界で自然に出ないような色の人が。

だけどその中でも、赤髪に金瞳っていうのは珍しいらしくて、『シーファ』の記憶の中でもその組み合わせの人はタキしかいない。……なんか理由があった気がするんだけど、何だったかな。

そんなことを考えていたからだろうか。

傍から見たら見つめ合ってるみたいな形になってたことに気付いたのは、タキとレアルードが顔を合わせてからの短い時間でお馴染みになった、不満を訴えるような自己主張の激しい視線を受けてからだった。

……この世界の人って目が口以上に物を言いすぎだと思います。

「……レアルード、話は終わったのか？」

無視する意味も理由もないので、こっちから声をかけてみる。レアルードは頷いた。

その横からこれまた強烈な視線を向けてくるピアは見なかったことにしておく。……たかだか一言口にしただけなのに理不尽だ。

意識して聞いてなかったからどういう会話が為されたのかは分からないけど、まあいいか。多分私（シーファ）には関係ない……よね？

「それならば、一度部屋に――」

言いかけて、そういえば、と気付く。我関せずな感じで頬杖をついてこっちを見ていたタキを振り返った。

「君を仲間に加えるということはひとまず決定したことになるが、聞きたいことが幾つかある。今はどこの宿に？」

「身上調査かなんか？　別にいいけど。――宿はとってない。飯食いにここ来たところでアンタ見つけたから」

「そうか。私達はここに部屋をとっているから、話はそちらでするとしよう。それでいいだろうか」

「オレは別に構わないぜ？　この町で宿とるならここにしようと思ってたしな」

……ん？　今の言い方だと、積極的に宿とるつもりはなかったみたいな感じだけど、タキにとってこの町って長居するつもりなかった場所なのかな。

そういえば『シーファ』の記憶だとタキって盗賊の根城に先に着いてたみたいだし、それっぽい。

「では、部屋に行くとしよう。……これからについても少し話したいが、先に彼と話すことになる。レアルードとピアはもう少しこちらに居ても構わないが」

レアルードはタキのことあんまり好きじゃないみたいだし、ピアにとっては見知らぬ人レベルだろうから（そういえばレアルード一応その辺話してくれたのかな。仲間云々のときにピアが驚いた顔はしてなかったから大丈夫だろうけど）、気を遣ったつもりの言葉だ

ったんだけど。

「いや、俺も戻る」

予想外に強い口調で言われて、びっくりした。

……いや別に、そんなじーっと見てこなくても反対するつもりも却下するつもりもないんですが。あとピアが明らかに不満そうな顔してるけどいいのかレアルード。

「私に否やはないが――ピアはいいのか」

「ピア？」

……なんでそんな如何にも予想外のこと言われましたみたいな顔してるのかなレアルード。もうちょっと空気読んで！

あからさまにむくれているピアを振り仰いだレアルードは、首を傾げて言った。

「買い物に行きたいんだったら行ってくればいいだろう」

えええ！？　そこでどうしてそんな台詞が出て来ちゃうの？　ピアの態度のどこをどう読んだらそうなるの！？　っていうか1人で行かせる気満々だよこの人！

「……1人で買い物に行ってもつまらないでしょ」

わあすごい、位置的に見下ろす形になるのに上目使い（雰囲気的に）とかピア、テクニシャンだ。だけど相手がレアルードじゃねぇ……。

「……？j

怪訝そうに首を捻るレアルード。通じてない、通じてないよ色々と……！

なんかもう鈍いとかそういうレベルなのこれ、なレアルードに頭痛がしてきたので、放置して先に部屋に戻ることにする。良心的な何かがうずいたけど気にしない。だって付き合ってられないってこんなの。

まぁ意思疎通頑張ってください。それなりに近い部屋から応援してます。多分。

レアルードとピアに声を掛けてから、タキと共に部屋に向かう。

――…ってちょっと待ってレアルード、会話ぶち切ってついてくるのは勘弁してください。これ以上ピアとの関係悪化させたくないんで！　後生だから止めて……！！

確認

とりあえずなんとかレアルードにピアを放置して着いてくるのを諦めさせて、今度こそタキと共に部屋へ向かう。

そういえば気分的な意味で瀕死だった＋寝て起きて謎の魔法陣のおかげで回復してからすぐに外に出たせいで、どんな部屋かちゃんと把握してない。広さはそこそこあった気がするけど……。

考えつつ辿り着いた部屋に入って、タキに備え付けの椅子を勧める傍ら部屋を観察して――あれ、と思う。

……気のせいだろうか、この部屋二人部屋に見える。ベッドは同じサイズのものが二つ、椅子も二つ。旅の荷は部屋の隅に置いてあるけど、そもそもピアって荷物持ってたっけ……？

二部屋とったのか、それとも経費削減的な感じでで二人部屋で三人泊まるのか。ピア女の子だし、前者？　でもレアルード、部屋に案内するときここのことしか言わなかった気が。

……考えてても仕方ないか。まずは目の前にあることを済ませよう。

「で、美人サンはオレにナニ聞こうっての？」

多分デフォルトなんだろうニヤニヤ顔のタキの正面に座って、な

んか含みありそうな言い方は気にせずさっさと質問を済ませることにした。

「順番が多少前後してしまったが――そうだな。まず、君は何を目的に旅を？」

「別に何も。あえて言うなら腕試しか？」

「では、私達の目的地がどこであれ、目的が何であれ、ある程度は付き合ってもらえるということか」

「まあ、気が向く限りはな。アンタ達色々面白そーだし」

……うーん、『記憶』から予想してたけど、とっても自由人な返答だ。

飽きたらポイッとされそうな気がものすごくする。まあそれがタキなんだと『記憶』が告げてるけど。

だってタキが旅の終わりまで一緒に居たことって三回に一回くらいだよ。半分行かないうちにオサラバとかざらだったよ。ホント自由だな！

「君の都合が許す限りで構わない。最低でも大きな町に着くまでは道行きを共にしてくれればとは思うが」

せめてレアルード達が連携とかその辺をある程度こなせるようになるまでは離脱して欲しくないなぁ、と思っての言葉だったんだけ

ど。
タキはそれを聞いて――すっごく意地悪そうな笑みを浮かべた。
「確約はできねぇな。――アンタが見返りくれるってんなら話は別だけど？」
「見返り、とは？」
「アンタの『隠し事』の内容――とか」
「何の事だか」
予想内の要求に、しらを切る。『シーファ』は顔に表情が出にくい（っていうかデフォルトが無表情）タイプでよかった。何言ってもやってもフラットで真意が読めない感じだし。そこは中身が『私』でも変わりないはず。
「まあ、ンな簡単に教えてもらえるとは思ってないけどな。――それに、」
意味ありげに言葉を切ったタキは、獲物を狙う捕食者の目で、私（シーファ）を射抜く。
「――自分の手で暴く方が、楽しみがあるってもんだよな？」

……うわあ歪んでる。いや歪んではないか。ある意味自分の欲求に素直なだけで。

とりあえずサドっ気溢れる（こういうのサドでいいのかな）発言はスルーして、本題に戻る。

『シーファ』、スルースキル高かったみたいだけど、天然なのか何かで鍛えられたのか。なんか達観と言うか浮世離れしてると言うか、そんな性格だったみたいだし、どっちもってところなのかな。

「先程君は剣士だと自称していたが――」

「それが？」

「本当にそれだけか？」

「そりゃどういう意味だ？　嘘を言ったつもりはないぜ？」

うん、私だって嘘だと思ったわけじゃない。『シーファ』の記憶を見る限り、確かにタキは剣士だ。『ただの』剣士じゃないだけで。

「全ての手札を明かせとは言わない。それはこちらが手の内を晒していない以上、理不尽な要求にしかならないからだ。だが、ある程度はこちらを信用してもらわなければ、道中に支障が出ることもある」

「――随分、明け透けに言うな？」

「それが私の誠意だ」

暗に「隠し事ありますよ」って言ったも同然だけど、まあこれくらいは仕方ない。『シーファ』も似たような問答（？）してたし。

何かを見極めるように私（シーファ）の目をじっと見てたタキは、暫くして軽い溜息を吐いた。

「――しゃーねぇな。こっちも多少は『誠意』見せろってことか」

「強要はしない。出会ったばかりの人間に信を置けなどと無理難題を言っていることは分かっている」

タキがこっちに興味を持ってることを逆手にとって言ったわけだから、興味より面倒さが勝れば離れていくことも視野に入れているし、何より――『記憶』というアドバンテージがあっての台詞なのもある。

……なんか騙してるみたいで気分悪いなぁ。分かってて言ってる、っていうのが。

「……それさ、分かっててやってんのか？」

一瞬、心を読まれたのかと思った。だけど、何だかニュアンスが違う。どういう意味だろう。

「それ、とは？」

「分かんないならいい。――で、さっきの続きだけど」

なんか謎を放置されたけど、どうやら話してくれるらしい。どこまでかは分からないけど。

仕方ない、といった表情で、タキは続ける。

「俺は剣士だ。それは間違いない。ちょっと変わってる自覚はあるけどな。……アンタもさっき見た『無効化』と――」

言いながら、タキは腰の剣に手をやる。同時に早口で何かを呟きながら空いた左手が宙をなぞる。

「『双剣使い』っつー、そこそこ珍しい特徴持ちだ」

気付けばタキの左手には、腰に提げていた――今は右手に握られている剣と色違いの剣があった。

そしてその双剣は、交差して私（シーファ）の首元にあてられている。

いつの間に、と内心驚くものの、顔には出ない。これもしかして頸動脈に当たってる？　とも思うけどやっぱり表情は変わらない。

それは『シーファ』の鉄壁ともいえる無表情があるからでもある

けど、一番の理由は――。

「もうちょっと、取り乱したりするかと思ったんだけどなー」

笑いながら剣を引くタキから、殺気が感じられなかったこと、だろう。

殺気なんて『私』はわからないけど、『シーファ』の経験と記憶が状況を認識するより先に『無害』だと教えてくれた。

それでもやっぱり驚いたり怖いと思ったりはしたはずだけど（曖昧になるのは自覚する前に剣が引かれたからだろう）、そこは『シーファ』の無表情に助けられた感じだ。

「……殺気が無かったからな」

「美人サン、結構戦い慣れしてる？　アンタらどっちかっていうと初心者っぽいと思ってたんだけど」

「初心者ではあるが、経験は皆無ではないというだけだ」

これ、嘘じゃないけど嘘になるのかな？　この『シーファ』は旅に出たことも修羅場を潜り抜けたこともないけど、何度も繰り返した旅の『記憶』があるから、殺気とかに敏感なんだよね。

……うーん、微妙なライン？　ただでさえ先に得てる情報量が違うから、できるだけタキに嘘つきたくはないんだけど。難しい。

「成程〜…って、そういや美人サン、名前は？」

……。あ。

「――すまない。礼を欠いた。シーファ・イザンという」

「まあ良いって。シーファ・イザン……シーファな。了解」

すっかり名乗るの忘れてた……いやあの状況で呑気に自己紹介は無理だったけど。

っていうかタキが名乗った時ピアいなかったし、改めて自己紹介してもらうべき？　とりあえずレアルードがピアに伝えてくれてるといいんだけど。

気を取り直して。

「そういえば、君は何も聞かずに仲間に入れないかと言ってきたが、一応話しておくべきだろうことがある」

「何？」

「普通、まずこれを訊くものではないかと思うが――私達の旅の目的についてだ」

言えば、タキは「ああそういや忘れてた」とか呑気に言った。いやいや、普通忘れないから。

「私達の旅の目的は、ひとつ。『魔王』を倒すことだ」

「魔王――ってあの？」

「君が何を指して『あの』と言ったかは私には分からないが、恐らくは君が思い浮かべているもので間違いないだろう」

「そりゃまた壮大な目的だな」

壮大……言われてみれば確かに。

――っていうか、そういえば、そもそもどうしてこのメンバーで魔王を倒しに行くことになったんだっけ？　『シーファ』の記憶の中でこの流れが当然だったから特に疑問も持たずに一緒に旅に出ちゃったけど。

ええっと、あと少しで思い出せそうなんだけど何だったかな。

高速で『記憶』を辿る。『私』の全く関わらない、旅に出る前の『シーファ』の記憶を。

レアルードに旅に必要な荷を教える――違う。

旅立つ仲間にピアが加わることをレアルードから聞く――違う。

一緒に旅に出ないかとレアルードに誘われる――違う。

人々の期待にプレッシャーを感じたレアルードを宥める――近い。

魔王の出現、伝承、運命――これだ。

辿り着いた記憶を更に詳しく思い出そうとしたところで――慌ただしげな足音と、乱暴に開かれた戸の音に、回想が断ち切られた。

道筋

「レアルード――それにピアも」

戸を壊す勢いで開けたのはレアルード。遅れてその後ろにピアが現れた。

……えーと、なんで二人とも不機嫌そうなのかな？

部屋に入ってきたレアルードが無言で近付いてくる。妙な威圧感を発してるけど本当に何がどうしたの……！？

私（シーファ）の後ろに回って威嚇するようにタキを睨むレアルードに困惑する。あと前方から悔しげな面持ちでこっちを見てるピアにも。

一体どういう流れでこんなことに……謎だ。

まあ何も言わないってことはそう重要なことじゃないのかもしれない。

せっかく二人も来たし、タキに確認したかったこととか言っておきたかったことはあらかた話し終わったし、これからの話をしちゃっていいだろうか。なんかそういう雰囲気じゃないっぽいけど、かといってこのままぼけっとしてるのもアレだし。

「ちょうど良かった。今、旅の目的についてタキに説明していたところだが――」

言いつつ立ち上がる。他に椅子がないから全員座ることはできないし、そんな中平然と座り続けるなんて芸当もできない。だって落ち着かないし居心地悪いよ絶対。

どうぞお座りください、的な感じにレアルードの方に椅子を動かしたけど、相変わらずタキを睨んでて気づいてくれない。

どうしようか考えてたらタキも立ったので、もうそのまま話に入ることにした。

思い浮かべた魔法陣を指先で宙になぞりつつ、短い呪を口にする。

そして現れるのは、この周辺の地図。通ったところ以外は簡易もいいところで、おおよその方角を見るくらいにしか役に立ちそうにない――まあＲＰＧではわりとお馴染みな感じの代物だ。

これまたお約束的に、自動マッピングシステム搭載だったりする。つまりこれから新たに行くところは、訪れた順に詳しい地図へ更新されるらしい。

どこまでもＲＰＧ風なことになんだかちょっと微妙な気分になるけど、まあ便利は便利だ。

地図を出したことで全員の注目が集まったので、机の上に地図を広げて本題に入る。

「私達が今居る……リリスの町はここだ。そして魔王が居ると言われているのはこの辺りになる」

言いながら、ちょうどリリスの町から正反対の場所にある広大な

空白の部分を指し示す。
地図上で見るだけでうんざりするような距離と種々様々な天然の防壁は見ないことにした。まともに考えると心折れそう。

「ひとまずは、このまま次の町に行こうかと思うんだが――」

「あ、ちょっと待ったシーファ」

「……何か問題があったか？」

遮ったのはタキだった。地図を覗き込んだタキは、行こうとしていた町とリリスの町のちょうど中間くらいの地点を指先でトントンと叩く。

「この辺にひとつ村があるらしいんだよ。俺、そこに届け物する依頼受けててさ。直接向かうよりちょっと遠回りになるけど、寄ってもらえるか？　品渡すだけの仕事だから時間はとらないし」

そのタキの言葉にまたレアルードの機嫌が微妙に降下した気配がしたけど、それよりも問題は。

「やっぱり変わらないのか……」

「ん？　なんか言ったか？」

「……いや。大きく道から逸れているわけではないんだな？」
「ああ、そのはずだけど。ただ、あえて立ち寄るには離れてるし、商売とかするにも村の規模が小さいから、あんまり行商人とかが寄りつかないんだと。だからわざわざ依頼がきたってわけ」

この辺りでは、届け物といえば信頼のおける行商人……商隊などに頼むのが主流だ。その巡行ルートにかからない場所となると、届ける手段が限られてしまう。
だからこそ、タキのような流れの剣士に依頼が来たんだろうけど――。

「――お前は『証』持ちの旅人なのか」

少し驚いたようなレアルードの言葉に、ハッとした。
『証』というのは、俗に『教会』と呼ばれる組織に認定を受けた者が持つ、ある種の身分と資格の証明みたいなものだ。『教会』の本義は別にあるけれど、ゲームとかでいうギルドのような役割も果たしているので、そこを通して今回のような依頼を受けたり出したりもできる。

『シーファ』にとってタキが『証』持ちなのも『教会』に繋がりがあるのも当然だったから全く疑問に思わず流しちゃったけど、今のつっこむなり驚くなりするところだったよ……！
何故なら『証』持ちはそれなりに希少だからだ。『教会』に依頼を出すのも依頼を受けるのも基本的には誰でも可能なんだけど、それは一定区域内――つまりひとつの『教会』支部（みたいなもの）

の管轄内で済むもののみらしい。

リリスの町にある『教会』の管轄区域はリリスの町の中だけ。つまりタキの言った村は管轄外に関わらず、タキはその依頼を受けてるってことになる。それはタキが『証』持ちだという事実を示すわけで。

見れば、レアルードもピアも少なからず驚いた顔をしていた。……え、私（シーファ）？　もちろん相変わらずの無表情ですが。

あれだよね、『シーファ』がこれまで表情筋使わなさすぎたから感情が顔に出にくいんだよ絶対。

「まあ、一応そうだけど。確かめるか？」

「……別にいい」

途端に嫌そうな顔になったレアルードに内心苦笑する。というのも、『証』は身体のどこかに刻まれるものだからだ。

パッと見でわかる場所にないなら、どこかしらを露出してもらわないとならないかもしれない――それを想像してレアルードは嫌がったんだと思うと、ちょっと笑えた。

「……話を戻すが、大して距離も変わらないだろうし、私は君の言う村に行くことに異論はない。レアルードとピアはどう思う？」

「シーファがいいなら、俺は構わない」

「……レアルードがいいならいいけど」

なんか似たような返答をした二人（とはいえある意味全然違うことを言ってるわけだけど）に微妙な気持ちになりつつ、「……だ、そうだ」とタキに向き直れば、にっこりと――胡散臭いくらいの満面の笑みでお礼を言われた。

……裏しか感じられないっていうのもある意味すごいよ、タキ。そしてレアルード、一応今のはみんなにお礼言ったはずなんだから、ブリザード発生させるの止めてください。

未だ広げたままの地図に目を落とす。タキが示した村がある辺りを指でなぞって、気付かれないように溜息を吐いた。

さっきここから次の町にそのまま向かうことを提案したのは、『魔王』が居るという場所に向かうのに効率的だからだけじゃなく、確かめたいことがあったからだった。

何度も『シーファ』が繰り返した旅の中、絶対に辿る道筋がある。その一つが、リリスの町から次の町の間にある、小さな村――盗賊に荒らされる村、だった。

そこで出会うはずのタキとリリスの町で出会ったから、もしかしたら、と思ったけれど、結局はその村に立ち寄ることになってしまった。

変わらない。変えられない。それが『運命』だとでもいうように。

だとしたら――その『運命』は、誰が決めたものだっていうんだろう。

……その答えを、多分『シーファ』は知っている。だけど、『私』の『知識』には、ない。それはきっと、『シーファ』が答えを隠したから。

ただ、時が来ればわかる、とだけ『知識』が告げる。

……本当、『シーファ』はなかなかに面倒で厄介で複雑な身の上らしい。『運命』とかもう一般市民の手に負えないんですが。

まあ、ひとまずは『旅』を進めていくしかなさそうだよね……人間関係もちょっとアレな感じなのに大丈夫なのか不安だけど、仕方ない。

やれることをやるしかないか、と開き直って、顔を上げた。

……とりあえずは、シーファとタキの睨み合い（睨んでるのはレアルードだけだけど）を止めさせるべきだよね、うん。本気で先が思いやられる……。

夢

その後のことは、まあ詳細には語らない。
軽く町を散策してちょっと買い物して食事なんかをしてから各自就寝した、とだけ。
ちなみに部屋割りは私（シーファ）とタキとレアルード（とってた二人部屋に一人プラスする形で落ち着いた。追加料金は発生したけど新たに部屋を取るよりは安いらしい。まあベッドとか足りないしね）、そしてピアが1人部屋、ということになった。
元々ピアは自分で部屋をとっていたらしい。まとめてレアルードがとっちゃえばよかったのに、と思ったけど、何か理由があるのかな？

レアルードとタキが同席するとどうしてもギスギスする空気は、もう仕方ないと割り切ることに決めた。どうせ『シーファ』の記憶でも、タキ参入後しばらくはぎこちない空気だったし。
それにしても、レアルードは妙に『シーファ』に過保護と言うか、意識を傾けすぎてると言うか……そんな感じなんだけど、理由がよく分からない。タキに対して隔意があるっぽいのも、多分それが関係してのことじゃないのかと思うんだけど。
もしかしたらまだ思い出してない『記憶』にそのヒントがあるのかもしれないけど、ちょっとした知識を思い出すだけならともかく、『シーファ』の体験した出来事そのものを『思い出す』のは結構な負担になるみたいだから（一気に追体験するみたいな形になるからだと思う。タキのことを思い出した時が良い例だ）、しばらくは理由不明のままでいいかもしれない。

……それにしても。

「――この不思議空間って、何？　夢……なの？」

真っ暗な、自分の姿も確認できないような空間で呟く。
思わず独り言を言ってしまうくらいには動揺してるんだな、と頭のどこかで冷静な自分が判断する。でもどっちかっていうとパニック気味だ。
状況とか、覚えてる限りの最後の記憶とかを考えるに夢なんだろうけど、ここまで意識が鮮明な状態の夢は多分初めてだ。明晰夢ってやつだろうか。

……って、あれ。今、言おうと思ったそのままの言葉が声になったよね？

「気のせい？　それとも、夢だから？」

今度はあえて思ったことを口にしてみる。やっぱりそのまま言葉になった。
そんなの当たり前のはずなんだけど、それが『当たり前』じゃないのに慣れつつあったから驚いてしまった。誰かに伝えようとしながらだと手が勝手に翻訳した文章を書くのと同じ原理なんだと思うけど、言葉を発するときには勝手に『シーファ』の口調になっていたのだ。
『シーファ』は妙にお堅い口調だけど、あの外見と声で（見た目

もさることながら、『シーファ』は声もよかったりする）私の口調だと違和感ありまくりだから良かったのかもしれない。

「で、結局ここがどこかはわからないわけだけど――」

ぐるりと辺りを見回した……つもりだったけど、真っ暗なうえ自分の身体さえ見えないし、正直感覚もあやふやだったりする。とりあえず見回せたかどうかも不安になるくらいに何も見えない。闇なんだか何なんだかわからないものしか見えない、というか見えてるのかもわからないレベル。

っていうか今更気づいたけど、これ『私』の声だ。

『シーファ』の声じゃなくて、『私』の声。ということは、今の私って『私』自身の姿なんだろうか。見えないけど。あ、触ればわかるかも。

そう思って、実行に移そうとしたところで――。

【伝　て　る　ろうか】

途切れ途切れの声が耳に届く。同時に、虫食いのような文字が脳裏に閃いた。

錯覚かと思ったけど、もう一度聞こえた――そして見えた文字に、そうじゃないと確信する。

【――伝わって、いるだろうか】

「え、えーと……？」

錯覚じゃないのはわかっても、理解がまだ追いつかない。正直ちょっとしたホラーに近い現象だと思うし。

でも、その『声』に聞き覚えがある気がして――そして気付く。

「シーファ……？」

【ああ、そうだ。……伝わっているのなら、良かった】

どこかまだ遠い声と、掠れたような銀色の文字。今にも消えてしまいかねないような、そんな印象を受ける。

【まだ安定していないから、そう長くは会話をすることができない。すまない】

続けて伝えられた言葉に、その印象が間違っていなかったことを知る。

シーファの言い方は、これから先安定することもある、安定すれば長く会話することができるっていう感じだったけど、何だか不安になる。本当に消えてしまうと思ったわけじゃないのに、何でなのかは自分でもわからなかった。

【恐らく君は私に聞きたいことも言いたいことも沢山あるだろうと思うが、】
【時間がない。だから、忠告を少しだけ】

申し訳なさと焦りとが滲む声に、気にしないでいいと口にすれば、ほっとしたような気配が伝わってきた。
……そういえば、この空間の中にシーファは居るんだろうか。声はどこから聞こえてるのかもよく分からないし、頭に浮かぶ文字は判断の手助けにならない。
まあ、今は特に重要じゃないから気にしなくてもいいか。

【私の辿った道筋は、あくまで目安程度に考えておいた方がいい】
【必ず辿る道筋もあれば、一度や二度しか辿らなかった道筋もある】
【君は君の思うまま、進んで行ってほしい】

「気にしすぎるのは駄目だってこと？」

【それもまた、君の選択だ】
【全く同じ道筋を辿れたことは、私にもない】
【君が君であるという事実によって、君は私と同じ道筋を辿れないだろう】
【……ただ、危険を避ける参考にはなるはずだ】
【巻き込んだ私が言うことではないが、極力君に危険な目には遭ってほしくない】

私が『私』だから、『シーファ』と同じ道筋を辿れない。それはすごく納得のいくことだった。タキとあの場所で出会ったことだっ

て、その一環なんだろう。

……危険については、あまり考えないようにしていたことだったから、ちょっと気持ちが沈む。

シーファの『記憶』では、シーファ自身が死にかけるような目に遭ったことはないみたいだったけど、私から見れば大怪我程度は普通にしていた。エルフだからなのか何なのか、尋常じゃない回復力が備わってるから大事にはならなかったみたいだけど。だからって痛みまで軽減されるわけじゃないし、私はマゾじゃないので痛かったり苦しかったりは極力お断りしたい。

【それと、魔法についてだが】

【私が『魔法』と定義づけしている程度のものならば問題はないが――】

【　の枠を　える　　な『世界　　』を　うの　、　　だ】

本当に、唐突に。

最初に聞こえた時のように、途切れ途切れの言葉と虫食いのような文字だけを残して。

不思議な真っ暗な空間も、シーファの気配も、何もかもが消えてしまった。

「――え？」

思わず漏れた間抜けた『声』が、『シーファ』のものになってい

るのに驚く。
さら、と視界の隅を流れたのは、見慣れてきた銀色の髪だった。
……どういうこと？　単に、『会話』が続けられなくなっただけ？
首を傾げつつ、現状を把握する手がかりがないか周囲を見てみようと顔を上げる。と。

【　は　や　く　】

嫌になるほど鮮明に聞こえた……見えた言葉に息を呑む。
シーファの言葉を表す文字が清廉な銀色なら、今見えた文字は淀んだ赤色。見るだけで不吉さに総毛だつような――濁った血の色だった。

【　はやく　ここまで　おいで　】

伝わってくる感情は、どこまでも愉悦に塗れていて。
まるで無邪気で残酷な子どもが、お気に入りの玩具で遊ぶのを心待ちにするような。
そんな、声だった。

【　おいで　『シーファ・イザン』　】

そして、私（シーファ）の名前が呼ばれた瞬間、それは始まった。

頭の中を、血の色の文字が、無秩序に、ぐちゃぐちゃに、掻き回す、ように、踊って、踊り狂って、侵食して、めちゃくちゃに、すべてを、壊して、蹂躙する、ように。

壊れる、壊れてしまう。壊されて、しまう。

わけがわからないまま、恐怖とそれを上回る何かに、叫び出しそうになったとき――必死な誰かの声が聞こえた、気がした。

そしてまた、全てが遠く消えていって。

ああ、目が覚めるんだと――助かったんだと、そう思った。

夜話

「シーファ！」

開けた視界の中、最初に認識したのは月光に煌めく金色だった。
回らない頭とやけに重い身体を意識しながらなんだろうと思って、気遣うような碧眼と視線がかち合って気付く。
……ああ、レアルードだ。

「よかった、目が覚めたか。随分魘されてたけど――また例の夢か？」

……『例の夢』？　なんのことだろう。
疑問に思うけど『記憶』は想起されない。ただ、こういうふうにレアルードに起こされるのが初めてではないということだけが分かった。

身体を起こしながら考えたけど何て答えるべきか分からなくて、曖昧に首を振る。それをどう解釈したのかは分からないけど、レアルードはほっと息を吐いた。

「……すまない。私のせいで起こしてしまったか」

言うと、「違う」と即答された。どことなく必死な否定に不思議に思うけど、理由を訊くことはできなかった。
コンコン、と小さなノックの音と共にタキが部屋に入ってきて、レアルードがベッドから離れてしまったから。
私（シーファ）とレアルードを交互に見たタキは、ちょっと肩を竦めてからこっちに近付いてきた。

「目、覚めたのか。……とりあえず、ほら」

差し出されたカップを反射的に受け取る。鎮静作用のあるお茶か何かなのか、気持ちが落ち着くような香りがした。

「それでも飲んでちょっと落ち着けよ。アンタ、今にも死にそーな顔してんぜ？」

それはおおげさじゃ、と思ったけど、やけに真剣な顔でレアルードが頷いてるのが見えたからおとなしくお茶（仮）を口に運ぶ。やっぱりハーブティみたいな味がした。

あの『夢』――そう呼んでいいかもわからないような、禍々しい『誰か』の『声』から抜け出せたのは、多分レアルードのおかげ、なんだろう。覚める間際に聞こえた声は、レアルードのものによく似ていた。
『シーファ』のものはともかく、あの血の色の言葉の主は誰だっ

たのか――何だったのかが気にかかる。思い出すと嫌悪感なのか恐怖なのかよく分からないものがこみあげてきて、振り切るようにぎゅっと目を閉じる。血色の文字の残像が、まだ瞼の裏や頭の中に残っている気がした。

気分を変えようと、少し離れたところに移動したレアルードとタキを見れば、何やら小声で会話してるみたいだった。内緒話だろうか。

もしそうならあまり見ない方がいいのかもしれないと思って、窓の外へと視線の向きを変える。眠る前よりも中天に近付いた月が夜空を照らしていた。寝ていたのはそこまで長い時間じゃなかったみたいだけど、ぐっすり眠っているべき時間なのには変わりない。

レアルードは否定したけど、やっぱり起こしてしまったんじゃないだろうか。二人の話が終わったら、その辺りを改めて訊こうかな。

やることもないので、少しずつお茶を飲みながら『シーファ』の言ったことを反芻してみる。

最後の方は聞こえなかったけど、聞こえた分だけでも結構重要なことを言われていた気がする。

私は『シーファ』の記憶全てを見たわけじゃないし、そんなことしたらなんかヤバそうなのだけは分かるからやるつもりはないけど、ある程度は思い出したい――というか、把握したいと思ってる。シーファが言ったように、危険を避ける指標にはなるだろうし、ある程度の『道筋』は知っておいた方がいいと思うから。

タキとかレアルードに関係する出来事とかは断片的に分かるんだけど、例えば何度も戦ったはずの『魔王』についてとか、これから

先のパーティメンバーについて（仲間になりうる人が他にもいることだけは分かってる）とか、知っておきたいのに思い出せてないことはたくさんある。

――……それに。

『意図的に』思い出せないようにされている『記憶』もいくつかあるみたいだってことは、何となくだけど感覚で分かっていた。『運命』を決めた『誰か』のことのように、『シーファ』が隠した『記憶』――『知識』が。

理由があってのことだろうっていうのは簡単に予測がつくから、またあの不思議空間で会話できたとしても、『シーファ』に直接聞くつもりはないけど。

なんてことをぼんやり考えていたら、無意識にお茶を飲み干してしまっていたらしい。傾けたカップから馴染み始めていた味が流れ込んでこなかった。

ちょっと間抜けだな、とか内心苦笑しつつ顔を上げたら、いつの間にか話が終わったらしいタキとレアルードがこちらを見ていた。どっちもどことなく気遣わしげなのが少し居心地悪い。

タキ曰くの「死にそーな顔」も大分回復したんじゃないかと思ってたけど、そうでもないのかもしれない。

「――話は、終わったのか」

「……あ、ああ」

「飲み終わったんなら横になれば？　どうせまだ起きる時間じゃないしな」

「いや。目が冴えてしまった。しばらくは起きている。……先程レアルードにも言ったが、私のせいで起こしてしまったのならすまない」

私（シーファ）の言葉を、レアルードが口を開くのより一瞬早く、タキが軽い口調と仕草で否定した。

「いーや？　俺もレアルードも、元々起きてたからアンタが謝ることじゃねぇよ」

「……起きていた？　だが、二人とも私より先に眠ったのでは――」

二人が寝静まった後に私（シーファ）は就寝したはずだ。『私』はともかく、『シーファ』の知識と経験からして気配を読み違えるはずはないのに、どういうことだろう。

その疑問には、レアルードが答えてくれた。

「……一度、お前を抜きで話したほうがいいと思って、夜中に下の食堂で会う約束をしていたんだ」

「オレとしてもずっとあんな調子でやりとりすんのはゴメンだったからな。了解したワケ。――途中で血相変えて部屋に戻るからナニゴトかと思ったけど」

「それは……」

レアルードが口ごもる。ちらりと私(シーファ)を見て、そのまま黙ってしまった。

……なんだろう。気になる。

でも聞いてほしくなさそうなレアルードの様子に躊躇ってたら、そういや、とタキが声を上げた。

「汗とかかいたんだったら着替えといた方がいいんじゃねぇの？着替えくらいあるだろ？」

「――ああ、そうか。そうだった、な」

確かに少しべたべたする、気がする。とはいえ、『人間』に比べたらエルフはあんまり汗とかかかないみたいだけど。

そんな『シーファ』の身体でこれなら、人間の身体だったら汗びっしょりになってたに違いない。

だけど、せっかく気遣って（？）くれたんだし、着替えようかと立ち上がって――くらり、と視界が傾いだ。

……あ、違う。単純に私(シーファ)が倒れたのか。

うまく身体に力が入らない。なのになんで完全に倒れてないんだろう、と思って、そこでやっと、タキに支えられてるのに気付いた。

「危ねーな。言えば着替えくらい取ってやるから、大人しく寝とけって」

「す、――すまない」

予想外に近くにあったタキの顔に、一瞬動揺する。声が上擦りかけたの、気付かれてないといいんだけど。

タキが私をベッドに逆戻りさせる間に、レアルードが着替えを取ってきてくれた。……あれ、またどことなく機嫌悪そうな気がするんですがなんで？

……あと、着替えづらいので二人ともガン見するの止めてくれませんか。ちょっとくらい視線逸らしてくださいお願いします。

それともこの世界って他人の着替えをガン見する文化でも……いや、ないな。

……一応、じっと見られたの最初だけで、一部始終余すところなく観察されることはなかったことは、双方の名誉のために付け加えておく。

なんか、気絶でもするんじゃないかって気になったが故のことだったらしい。それにしても半端ない目力だったけどね……。

それは不可避の、（前書き）

※ぬるいですが暴力描写があります。

それは不可避の、

改めて眠りについた翌朝の体調は、すこぶる快調とまではいかないものの、まあ旅に支障ないくらいには回復していた。

寄る予定の村までは一日かからないくらいの距離ということで、朝のうちにリリスの町を出るということは昨日話し合ってあったんだけど、あっさり出発というわけにはいかなかった。

昨日の前半の体調不良と夜中の悪夢による不調のせいか、やたらと心配してくるレアルードを軽くあしらい（まともに相手をすると出発を遅らせようとか言い出しかねないレベルだった）、突き刺さるピアの視線を意識から除外し、「抱えて行ってやろうか？」とかふざけたことを言うタキをいなして、どうにかこうにか町を出て。

道中は特に問題なく――私（シーファ）にちょっかいかけてくるタキと、それに不機嫌になるレアルードと、それに輪をかけて不機嫌になるピア、という何とも言い難い構図はあったものの――順調に進んだ道程の先、辿り着いた村は。

……略奪の真っ只中にあった。

泣き叫ぶ声がする。親を呼ぶ子どもの声。恐怖と嫌悪に震える女の声。子を守ろうとする親が逃げろと叫ぶ。それを嘲笑するかのように響く、下卑た笑い声。

簡素な木造の家の扉が破壊されて、見るも無残に傷ついた男性がそこから転がるように出てきた。――違う、投げ出された。

「……ッ！！」

息を呑んだレアルードが、今まさに連れ去られようとしている女性を助けるために駆け出す。一瞬後に別の方向へと走り出したタキが、すれ違いざまに「アンタらはここから動くなよ」と鋭く告げた。

……何、これ。

問いにすらなっていない思考に、『シーファ』の記憶が『盗賊による略奪』だと告げる。

……知っている。それとも、『知っていた』？

――そう、深く考えていなかっただけで、『私』は知っていたはずだった。この村が盗賊に荒らされる『運命』にあることを。

『シーファ』が幾度旅を繰り返しても、それを回避することはできなかった。旅の『はじまりの日』は決まっていて、『シーファ』はレアルードと旅に出ることしか許されてなくて、だからどうして

もこの村を救えない。

『シーファ』の記憶の中、何度も何度もこの村は蹂躙されて、荒らされて、搾取され、そしていつか再生する。生々しく、陰惨な光景を経て、『日常』を取り戻す。

そうであってくれと『シーファ』は願って、繰り返し繰り返し復興に手を貸した。気付かれないように、エゴであることを知りながら、己の持てる力を一握りだけ。それすら本当は赦されないと、身を以て思い知る。その繰り返し。

『シーファ』の苦しみを『思い出す』。まるで自分のことのように。

――なのに、どうして。

『私』は、目の前の光景を、遠い映画の出来事のように思ってるんだろう。

叫び声。悲鳴。人間(ヒト)が、殴られる音。

昨日の『血の色の声』より、生々しく身に迫る――そして『私』

が体験したことのない、暴力で彩られた光景。
ショックを覚えて、悲鳴の一つでもあげて、逃げ出してもおかしくないこの光景を、どうしてこんなに平静に見ているんだろう。
混乱してる？　ショックを受けて動けない？　自覚のないパニック状態？
そのどれもが違うのだと、どうしようもなく『分かって』しまう。
――…シーファ。
きっと、呼びかけても届かない名前を、唇だけで呟いた。
笑い出したいような、泣きたいような――心の中がぐちゃぐちゃでどうしたいのかすらわからない。
「……これも、『出来る限りのこと』のうち、か」
『私』の世界がここと比べてあまりにも平和で、平和すぎるから。こんなふうに『私』の常識とかけ離れた光景が日常茶飯事に起こるから。
『私』の精神が壊れないように、狂わないように、『シーファ』は制限をかけたのだ。
『基準』を超えた感情が、『私』に認識されないように。

『シーファ』に悪意なんかなくて、全くの善意によるものなのは分かってる。
……だけど、この、今の『私』の状態が。

『異常』で、『怖い』としか、思えない。

『感覚』でそうあるべきだと思う『自分』と、実際の『自分』が乖離する。

無意識に握りこんだ指先が、震えている。なのにただ荒らされる村の様子を見続ける自分がいる。

気持ち悪い。怖い。いやだ。なんで、こんな、――

「――離してッ！」

唐突に近くから聞こえた怯えを含んだ声に、はっと我に返る。
いつの間に動いたのか、村の奥に近付いていたピアが、屈強な男に捕まえられていた。なんとか拘束を逃れようともがいているが、相手はびくともしない。
近くにはレアルードの姿もタキの姿もない。何人か盗賊と思われる男が倒れているところを見ると、この辺りを制圧した後に奥に向かってしまったらしかった。ピアを捕らえている男は、タイミング悪くレアルード達と会わずにこちらに来たんだろう。

タキが「動くな」と言ったのは、私とピアが近接戦闘に長けていないからだけじゃなく、ちょうどこの場所が死角になるからでもあったのに――どうしてピアはあそこにいるんだろう。
思考に沈んでピアに気を配っていなかったことを悔やみつつ、自分のとるべき行動を考える。

やみくもに出て行っても勝算はない。まったくできないわけじゃないけど、『シーファ』は接近戦に向いてない。かと言って、魔法を使うには二人の距離が近すぎる。『シーファ』の『魔法』は基本的に範囲指定だから、巻き込まないで済む保証はない。やりようによっては不可能ではないかもしれないけど、細かい指定までできるほど『私』はまだ魔法に慣れてない。

「離せって言ってるでしょ！？　はなッ――」

不自然に途切れた声に目を凝らすと、当身でも食らわされたのかぐったりとしたピアを、男が抱え上げるところだった。
このままだとピアもこの村の人達のように連れ去られてしまう。多少巻き込むのを覚悟で『魔法陣』を顕現させかけたところで、

「おっと、オイタはダメだぜェ、『シーファ・イザン』？」

一瞬で背後に現れた圧倒的な気配と、楽しむような声、そしてねっとりとした『闇』が視界を覆い潰すのを認識したのを最後に。

『私』の意識は、途切れた。

『ジアス・アルレイド』

鏡の向こう側、『シーファ』が必死な様子で何かを言う。いつかと同じように声は全然聞こえなくて、『シーファ』はそれでも懸命に何かを伝えようとしていて、『聞こえない』ことにすごく申し訳ない気分になる。

そっと、鏡に触れる。冷たい感触に阻まれて、向こう側に手を伸ばすことはかなわない。だけど、触れた箇所からじわりと染み出すように、『シーファ』の感情と思考の断片が伝わってきた。

何よりも強く感じとれたのは『焦り』。それから、『動揺』。

どうして、という思いと、やはり、という諦念。

（勘付かれたか）

（否――まだ『気まぐれ』の範疇のはず）

（直に会いさえしなければ、気付かれることはない――）

『彼』が村に現れることは今まで無かったのに、と考える一方で、あの『接触』のせいだ、と納得する――『私』じゃない、『シーファ』の思考。

『シーファ』が魔法陣を描いた。それがふわりと『私』に向かう。前のものとは違う、その魔法陣が示すのは――外敵を退けるための障壁。

それが『私』を包み込んだ瞬間、弾かれるような衝撃が『私』の意識を揺るがして――意識が、覚醒した。

「――ッてェなぁ……」

受けた痛みを表す言葉と裏腹に愉(たの)しげな笑みを浮かべた顔が、すぐ近くにあった。驚きに一瞬息を呑んで、慌てて現状の把握に努めようと視線を動かせば、彼が手を掛けたんだろう袷がわずかに乱れているのに気付く。

『シーファ』が何のためにあの『魔法』をかけたのか理解して――そしてその危機が未だ去っていないことも同時に知った。

目を開けた私(シーファ)に気付いているだろうに、大した反応も見せない男は、赤く爛れた――そして今まさに修復されている右手をぶらぶらとさせながら、もう一方の手を伸ばしてくる。再び展開された障壁を力技でこじ開けようとするのに、咄嗟に顕現させた魔方陣で本体ごと吹き飛ばした。

空中でくるりと回転し、何事もなかったかのように着地した男――『ジアス・アルレイド』を、立ち上がって真正面から見据える。

褐色の肌、顔の半分以上を覆う、刺青に似た紋様。切りそろえられていないざんばらの髪が、限りなく黒に近い藍色なのだと『知っている』。

彼もまた、『シーファ』の幾度も繰り返した旅の中で、一度ならず顔を合わせることがさだめられている人物だった。

「――何の、つもりだ」

「アレ、聞こえてなかった？　『オイタはダメだぜ』って言ったろ？」

「しばらく会わないだろうという趣旨の言葉を聞いたのはつい先日だったと記憶しているが」

「あっはっは、そりゃ事情が変わっちまったから仕方ない。まァ、あっちには介入する予定はなかったんだけどな。ついうっかり手ェ出しちまった」

からからと笑う目前の男は、純粋な人間じゃない。もちろん『シーファ』と同じエルフであるわけもない。

『魔王の眷属』、そして――ある意味では『シーファ』の昔馴染みと言える人物、だった。

「俺様悲しい中間管理職だからさァ、ちょっと行って来いって言われたら拒否権無いわけよ。魔王サマも何が気になったんだかねェ？」

「私が知るはずがないだろう。……それより、ここから出せ」

「せっかちだねェ、『シーファ・イザン』。まァもうちょっと付き合えって。まだ『確認』終わってないんでね」

さまざまな色をぐちゃぐちゃに混ぜ込んだ末に出来上がったような混沌の闇が広がるここは『ジアス・アルレイド』のテリトリーだ。『魔王』に近しいが故に与えられた力と、ジアスが生来持っていた力とが合わさって作り出された、異空間。

ぐにゃり、と近くの空間が歪む。そこから溢れだすように現れたジアスが操る『闇』を『魔法』で打ち消そうとするも、『闇』は魔方陣すら塗りつぶす。

――ここは『ジアス・アルレイド』に有利すぎるフィールドなのだと、『記憶』が告げる。けれどそれは現状を打破するのに何の役にも立たない。

質量を増した『闇』が幾つもの魔方陣を呑み込んで、その触手を私(シーファ)に伸ばすのを視界に収めながら、身を翻そうとして――『ジアス・アルレイド』本人に阻まれた。

「――ッ…！」

「おお痛(いって)ェの。俺様の回復速度上回るたァ、また随分とえげつない『魔法』なことで」

音を立てて爛れゆく己の手に頓着せず、私(シーファ)の首を鷲掴みにしたジアスは飄々と軽口を叩いた。触れた場所から、『シーファ』が作り上げた『魔法』が無理やり壊される感覚がする。同時に、『シーファ』の中に注ぎ込まれた『闇』が活性化して、身体の自由を奪う。

意識を失っている間に準備が為されていたことを理解して、苦々しい気持ちが湧き上がった。多分、最初の接触時――『闇』によって意識を奪われた時に仕込まれていたんだろう。

「――は、なせ…っ！」

「言われて離すくらいなら最初からやってねェって、なァ？　俺様だってちょっぴり心苦しいんデスヨ？　これでもお前のこと気に入ってんだぜ、『シーファ・イザン』」

そう言いながら、『魔法』を完膚なきまでに壊していく彼の顔は愉しくて仕方がないと言わんばかりの表情だった。

『気に入っている』からこそ愉しんでいるのだと、言われずとも分かる。

『魔法』が壊される速度に反比例して、ジアスが受けるダメージは減少する。時間を巻き戻すかのように『修復』されていく掌の感触が生々しい。

それに顔をしかめる私（シーファ）を愉しんでいる風なのがまた趣味が悪い、と思う。

……『ジアス・アルレイド』が快楽主義の嗜虐趣味（サディスト）なのは『シーファ』の記憶からなんとなく分かってたけど、ここまでとは。

完全に壊された『魔法』の残滓が消え去るのを待って、ジアスは再び私（シーファ）の服の袷に手をかけた。

「いやァ、脱がしても面白くないカラダなの知ってても、なんかイケナイコトしてる気分になるねェ。やっぱ顔は大事ってことかね？」

『シーファ』の服の構造上、あっさりと袷は解かれて。

肌蹴させられた服の隙間から褐色の指が肌に触れた。つぅ、と指先がなぞるのは、今は発光することもなくただ在るだけの黒色の文様。

「うーん、特に変化はナイっぽいんだけどなァ……」

ジアスの指が黒色の線に触れるたび、微かにそれが明滅する。
たっぷり時間をかけて文様の全体を確認したジアスに、少しの苛立ちと呆れを込めて言葉を投げた。

「――……気は済んだか」

「うんにゃ？　ケド、ま、いいか。消えてないし壊れてもないなら、魔王サマ的には別に構わないだろーし」

やっと離れたジアスに嘆息する。拘束が解かれたのを感覚で感じ取って、自分できちんと服を整えた。

「そういや『レアルード』はどうよ？　『タキ』も一緒みたいだったし。あとあの女も」

「……答えると思うのか」

「儀礼的なアレだって。ンな怖い顔すんなよなァ」

わざとらしく肩を竦めるのに苛立ちが募るけれど、反応を返せば相手の思うつぼだ。

――それに、聞かなければならないこともある。

『ジアス・アルレイド』は紛れもなく敵側の人物だけど、『魔王』の動向を間接的に知るのに適した人物でもあるのだ。明確な『敵』として現れる場合以外の接触時には、『シーファ』は多少なりと彼と言葉を交わすようにしていた。

もちろん彼の言を完全に信用していたわけじゃなく、ある程度の指標にしていた、ってくらいのレベルだったみたいだけど。

「それで、何を言われてこんなことをしたんだ」

「なんか気になる感じがするから見て来い、的なカンジ？　こういう時下っ端は辛いねェ。その分待遇好いからいいけどさァ。何が気になるんだか、と思ってたら俺様の不意打ちも思いっきり喰らうし、何？　なんかあったわけ？」

「……」

「まァ、俺様に言う義理はねェけどさ。『最初』は制限かけとくのがお前のやり方なのは知ってるけど、なァんかちょっと違う感じするんだよなァ」

それは十中八九『シーファ』の中に『私』が入っているからだろうけれど、もちろん口にはしない。

ちょっとの間首を捻っていたジアスは、「まァいいか」と割合あっさり考えるのを放棄してくれたので、内心安心する。

「んじゃ、まァ、そろそろ頃合かね？」

ニヤリと笑ったジアスがパチンと指を鳴らすと、周囲の『闇』が急速に集まって小さな立方体を形作り、ジアスの目前に浮かぶ。それを手にしたジアスが小さく何かを呟けば、『闇』の消失により脆くなっていた空間は簡単に壊れていった。

「――さァ、『シーファ・イザン』。せっかくだ、楽しませてくれよ？」

空間の欠片が砕けて宙に消えゆく中、囁くような愉悦の混じった声が耳を掠めて。

投げ出された先には――人質にとられたピアと、彼女を盾にする盗賊の首領、そしてそれに対峙するタキとレアルードという、見覚えがありながらも『記憶』とは決定的に違う光景が、あった。

予定調和

突然宙に現れて落ちてきた（ようにしか見えないだろう）私（シーファ）に気付いたタキが目を丸くするのが視界の隅に見えた。でもそれに応える余裕なんてない。今まさに落下中だからとかそんな理由じゃなくて。

ジアスが私（シーファ）を解放したタイミングと、その場所が問題だったからだ。

もし目の前にジアスが居れば、襟を掴んでがくがく揺さぶってやりたいくらいには趣味の悪い場面選択だった。そして『シーファ』が辿った中には一度もなかった状況でもある。

空中で体勢を立て直して着地する。『シーファ』の身体能力が高くて助かった。それでも着地点のまずさはフォローできないわけだけど。

「――っ、シーファ！？」

レアルードが驚愕に染まった声で私（シーファ）を呼ぶ。

視線を前へと向ければ、盗賊の後ろ姿、震えるピア、私（シーファ）を認めて動揺を表すレアルード、どう動くべきか状況を見定めようとするタキ。

……つまり私（シーファ）の位置は、ピアを人質にとっている盗賊の背後、なわけで。

やっと私（シーファ）が現れたことに気付いた盗賊が振り向こうとする。それを待たずに『魔法』を放とうとして――強烈な気持ち悪さに集中が乱れた。

「楽しませてくれよ」――そう言ったジアスの真意を知って、もし次会ったら思う存分『魔法』をぶちかまそうと心に決める。腹いせとしては可愛い部類だと思う。うん。

霧散しかけた『魔法陣』の構成を変化させて、軽い目くらましの『魔法』を発動させる。ギリギリなんとかなったけど、それが限界。意識をそっちに振り分けたせいで自分の身体を支える余力もなくなって、元々近かった地面が急速に近づく。せっかく綺麗に着地できたのに地面と仲良こよしにならないといけないとか酷いと思う。

――じわり、とあの黒の文様が疼く。ジアスによる『確認』は、僅かに綻びかけていた『呪』を強化した。そこに加えて、『魔法』使用をトリガーにした仕掛けまでご丁寧に用意されたら、こうなるのは当然と言える。

隙をついたタキが盗賊に斬りかかって、それを辛くも逃れた盗賊から、レアルードがピアを救出する――その一連の出来事は、見えずとも分かった。そして、絶対的な優位を覆された盗賊が、その原因になった私（シーファ）に一矢報いようと殺意をみなぎらせて刃物を振りかぶるのも。

どこかで見た情景。『シーファ』が何度も繰り返したそれを、少し変えただけの、予定調和の『危険』。だけどここ（・・）に伏兵は――乱入する『タキ』はいない。
もう一度『魔法』を発動させようと試みるも、今度は『魔法陣』が形にすらならなかった。
もちろんまだ身体は思うように動かせるようにはなってない。

……ああ、これってもしかして『万事休す』ってやつ？

っていうか『私』が『シーファ』になってからこんなのばっかりな気がする。昨日今日で問題ない状態だったのって半日にも満たないよね。

痛いのはヤだなぁ、と思ったのと同時に肩口を鋭い痛みが襲った。
そのタイミングの悪さになんだか笑いそうになって、結構ヤバい精神状態なんじゃ、と今更思う。でも村の情景を見た時のような乖離は感じられないから、それほどでもないのかもしれない。『私』にとっての非日常が続きすぎて、ちょっとテンションがハイになってるだけで。

まずいかも、と思いつつも動けなくて地面に伏せたままでいたら、盗賊の気配が吹き飛ばされるように瞬間的に遠ざかった。次いで、刺さったままだった粗悪な剣が引き抜かれる感触。

「――っ…」

「痛いよな、悪い。でもちょっと我慢してくれな、シーファ」

うつぶせた状態から、傷のない方の肩を支えに起こされる。
視界が霞む――それから、傷のせいだけじゃない、じわじわと広がる熱。『毒』だ、と『シーファ』の記憶が告げる。

……なんか、もう、踏んだり蹴ったりだ。何か憑いてるんじゃないだろうか、私。

『シーファ』の尋常じゃない回復力のせいで既に塞がりかけている傷に気付いたタキが小さく息を呑んで、それからもう一度「悪い」と呟いたかと思うと――手早く取り出した短剣で、傷の付近を浅く切り裂いた。

痛い……はずなんだけど、毒が回って来たのか（随分即効性のある毒らしい）、傷を中心に痺れたように感覚が鈍くなっている。裂かれたことは分かっても、痛みには繋がらない。
傷を露出させるように片肌を脱がされて、新たに血が滲んだ傷口にタキが口を寄せる。ぼんやり知覚したそれに反応するべきなんだろうと思うけど（色々な意味で）、どうにもこうにも身体が思い通りにならなかった。

何度か血を吸いだしては地面に吐き捨てるのを繰り返したタキは、私（シーファ）の傷が完全に塞がるのを見届けてから、見苦しくない程度に服を整えてくれる。甲斐甲斐しい――っていうのはちょっと違うか。

随分必死な様子だったなぁ、と私（シーファ）の身を案じてだっただろうことを棚に上げて考える。

『シーファ』は毒に耐性があるとか無効化できるとかはないけれど、毒によって死に至ることもない。それを『知っている』から、デフォルトの笑みも軽口もなく必死な様子で処置をするタキがなんだか不思議だった。いや、タキは『知らない』から当然なんだけど。

「ある程度は取り除けたと思うけど――気分は？」

真剣な様子で訊いてくるのにとりあえず言葉を返そうとしたら、ジアスのせいなのか毒のせいなのか、うまく口が動かなかった。それを察したタキが、「話せないなら無理はするなって」と問いを撤回してくれる。

……タキって何気に気遣いできる人だよねぇ。惜しむらくは、普段はあえてその辺スルーすることが多々あるってことだけど。

レアルードもタキくらい察しが良ければピアのこともうちょっとどうにかできるんじゃないのかな、と思ったけど、レアルードって日常生活以外はわりと鋭い方な気がする。注意力の使い方の問題なのかな？

そういえばレアルードはどこに、っていうか何してるんだろう。盗賊吹っ飛ばしたのは多分タキだから、つまりピアを助け出した後のレアルードの動向が不明だってことになる。

……あ、もしかしてピアも怪我とかしちゃったのかな。私（シーファ）と同じで毒くらっちゃってたとか。その処置をしてるとか。うん、ありそう。

なんて納得しかけたところで、速攻それが裏切られた。

「シーファ、無事か？！」

勢い込んで視界に入ってきたレアルードの腕に、可愛らしく涙目のピアがくっついている。どう見ても怪我はなさそうだ。予想は全く当たっていなかったらしい。

……あ、いつの間にか視界回復してる。でもまだちょっとぼやけた感じ。傷（もう塞がってるけど）周辺の痺れもまだ残ってるし、動けそうもないなぁ。あと返事も難しい。

「毒が少し回ってる。できる限り処置はしたから、安静にさせとくしかねぇな。喋るのにもちょっと影響出てるから無理に喋らせるなよ？」

「誰が無理強いなんてするか！」

……言いたいことは分かるけどその言い回しはどうかと思うよ、レアルード。

案の定、タキがなんか微妙な顔になった。

「あー……分かってんならいい。で、そっちの嬢ちゃんは？」

「――……怪我はないようだ。特に乱暴な扱いをされたわけでもない

らしいし――」

淡々と答えるレアルードにちょっとびっくりする。テンションの落差激しくない……？

多少ショックは受けてるけど身体的な害はない、っていう内容のレアルードの報告（？）にどことなく不服そうなピアを観察していて、しきりにある場所をさすっていることに気付く。

……あ、盗賊に掴まれてたところ、ちょっと痣になっちゃってるんだ。

服で大部分は隠れてるけど、レアルードもタキも気付かないことはないだろうくらいには目立つ。

ってことは、レアルードはあれを『怪我』に数えなかったってことなんだろう。で、ピアはそれが不満、ってこと？

確かにあれは痛々しい。ピアは見た目かなり可愛い女の子だし、そんな子に痛々しい痣とかあると気になる――って思うのは、私が『私』だからだろうか。思い切り二人がスルーしてるってことは、この世界ではそんなふうには思わないのが普通なのかもしれない。

でも気になるものは気になるし、ついでにジアスの趣味の悪い仕掛けが無効になってるかを確認するのも兼ねて、威力の低い回復魔法を発動させてみる。

きらきらしいエフェクトと共に、ピアの肌に浮かんでいた痣がすうっと消えた。それに気づいたレアルードとタキがちょっと目を丸くしているのが見える。

……体調に変化がないところを見ると、どうやら仕掛けはなくなったと考えてよさそうだ。そもそもジアスの能力だと、長時間私（シーファ）の『魔法』の発動を阻害することは難しい。今の『シーファ』だからこそ、ああいうちょっかいが可能だったわけだし。

「――ああ、そっか。魔法があったんじゃん。シーファ、自分に回復魔法すれば毒も抜けるんじゃ？」

「いや、それは無理だ」

「へ？」

タキの言葉を否定したのは私じゃなくて、レアルードだった。『シーファ』と付き合いの長いレアルードは、シーファの『魔法』についても多少知っているのだと『記憶』にある。まぁ、そうじゃないと一緒に旅に出るなんてことにはならないよね。

「シーファは自分を対象に魔法を使えないんだ。体質だと言っていた」

「体質……？」

怪訝そうに呟いたタキが私（シーファ）に視線を向ける。何か言おうとしたのか口を開きかけたのが見えて――ふと気づいたように私（シーファ）に駆け寄って跪いたレアルードの身体に阻まれて見えなくなった。

……レアルード、あれだけがっちり腕をホールドしてたピアを一瞬で置き去りにしたよね……。ある意味すごい。縄抜け的な才能ありそう。

「シーファ」

心底気遣うような目に、なんだかむず痒くなる。……まぁ、『シーファ』の表情には出ないんだけど。

「いつまでもこんなところにいても仕方ないし、回復も遅くなるだろう。休めるところに移動しよう」

今更だけど、現在地点は村に隣接した小さな山の一角にある、盗賊達の根城である洞窟だ。薄暗いし肌寒いしじめじめしてるし、長く居て気分がいい場所じゃない。

だからレアルードの提案は歓迎できるものだったわけだけど、残念ながら今の私（シーファ）に自力移動は難しい。まさかその事実を忘れてるなんてことはないよね、とレアルードの頭が鶏以下なんじゃないかとこっそり心配したんだけど、結果的にそれは杞憂以外の何物でもなかった。

……だからってお姫様抱っこ状態での移動は予想外でしたけどね

！　なんでそのチョイス……！？

明らかに面白がってるタキでもあからさまに嫉妬してきてるピアでもどっちでもいいから、誰かつっこんで……！　居た堪れないしものすごく恥ずかしいよこれ。新手の拷問レベルだと思う。本気で。

過剰と必然

「そもそも、お前（シーファ）は自分の身を顧みなさすぎる」

「そんなことは――」

「自覚がないだけだ。とにかく、しばらくは絶対安静だって言っただろう」

とりつくしまのないレアルードに内心途方に暮れる。

『シーファ』の記憶にあるよりちょっとだけ作りの良い部屋とやわらかなベッドになんだか微妙な気持ちになった。

――ここはレームの町。盗賊に荒らされたあの村から見ればリリスの町のちょうど反対側にあって、この周辺では規模の大きい部類に入る。そして、タキが受けた届け物の依頼を遂行した後に向かおうとしていた町だった。

今、私（シーファ）とレアルードがいるのはそこにある宿の一室で――ぶっちゃけて言うと、私（シーファ）はレアルードによってちょっとした監禁状態に置かれていたりする。

……いや、さすがに監禁は言いすぎたかもしれない。何もこの部屋から出してもらえないとかそういうわけじゃないし……。ただし絶対レアルードがついてくるけど。というかまず部屋を出る段階でレアルードにお伺いを立てないといけないけど。

なんでこんなことになったかと言えば、レアルードがなんか色々突き抜けちゃったからだ。
何がどう突き抜けたかを説明するには、まず盗賊の根城があった山から下りた後のことを話さないとならない。

身体がうまく動かせない状態の私（シーファ）をお姫様抱っこで運ぶという、私の精神にクリティカルヒット（もちろん悪い意味で）な行動をとったレアルードは、人ひとり抱えているとは思えない速度（でも絶妙に私（シーファ）に負担を掛けないようにしていた）で山を下りた。
明らかに他二人置き去りにする気満々だった。純粋な前衛向きの人間が本気出すとこうなるのか、と半ば現実放棄しつつ思ったのは記憶に新しい。

曲がりなりにも仲間である人間を事実上置き去りにしながら村に着いたレアルードは、あれよあれよという間に私（シーファ）を一旦村の人に預ける話をまとめ、入れ違いに村に戻ったタキに私（シーファ）の監視（「絶対目を離すなよ」とか言ってたからアレは監視って言っていいと思う）を頼むと、ものすごい速度で――本当に人間なのか疑わしくなるレベルだった――どこかへ走り去った。

そして何をどうやったのか、戻ってきたレアルードは、そこそこ誂えの良い馬車（とその持ち主）を伴っていた。ヒッチハイク的なことをやったのかと思ったけど、持ち主との会話を聞く限りなんかちょっと違うっぽかった。持ち主っていいところのお坊ちゃん風だったんだけど、何て言うか……憧れとか尊敬とか「一生ついていきます兄貴！」的な崇拝とかそんな感じのキラキラした何かが出てた。
一体何が……？

結局詳細は不明なまま、馬車に乗せられ（全員は入らなかったからタキが御者台に座ってた。ついでに御者の仕事までしてた。いや御者の人は居たんだけど、ちょっと運転が荒い感じだったから正直助かった）、眠ったんだか気絶したんだか自分でも定かじゃない意識の消失から現実に戻れば、今現在居る宿の一室だったわけで。

ちなみに後から判明したんだけど、私（シーファ）、丸一日目を覚まさなかったらしい。夢も何も見なかったから全然そんな感じしなかったんだけど、やっぱり色々身体に負担がかかってたりしたのかもしれない。

だからまあ、レアルードのちょっと過剰じゃない？って感じの心配っぷりも仕方ないかな、と最初は思ってた。……最初は。

けど、いくらなんでも三日（実質四日）もこの状態なのはどうかと思うんだ……！

絶えず見張られているような生活に嫌気がさして、レアルードにそれとなく旅を再開していいんじゃないか的なことを言ってみた結果が冒頭のやりとりなわけで。

丸一日寝てる間に身体は完全回復してたし、正直ずっとベッドで寝てるのは気が滅入る。

もう大丈夫だから、と何度言ってもレアルードは信じてくれない。確かに体調悪いコンボが続いた挙句に行方不明（仮）になって、なんかよく分からないけど戻ってきたと思ったら刺されて毒まで受けちゃうとか、色々アレな感じだったけど。でも毒は即効性だった代わりに持続性はあんまりなかったし、後遺症みたいなのもないみた

いだし、絶対安静っていうほどじゃないと思うんだけどな。

全く外に出してもらえないわけじゃなくても、絶えず見張られてる――レアルードにそういうつもりがあるかどうかはともかく、私はそう感じる――のは精神的に辛い。……あれ、なんかデジャヴ？

「レアルード。本当にもう体調は悪くないんだ。心配してくれるのは有難いが、これでは身体も鈍ってしまう」

「――そう言うから予定通りに向かった村で、あんなことにならなかったなら信じた」

……それを言われると弱い。い、いやだけどここで引き下がったらまた同じ問答の繰り返しになるし！

「あれは、少し悪いことが重なっただけで――……もう、あんな失態は犯さない」

あそこで『ジアス・アルレイド』がちょっかいをかけてこなければ、流石にあんなことにはならなかった。そもそも『シーファ』は実力的にはかなり高いものを持ってる。盗賊に後れを取ることも本来はなかったはずだった。ましてや、丸一日寝込むなんてことも。

『私』が『シーファ』であること、それから『ジアス・アルレイド』の介入によって、その『ありえない』ことは起こってしまった

わけだけど。

あの『毒』もまた、『ジアス・アルレイド』が手を加えたもの。本来ならば少し身体が痺れる程度のものだったのを、毒素を強めてより強力に『作り変えて』いたのだ。

道理で『シーファ』の記憶にあるより効きがいいと思った。……本当、悪趣味にもほどがある。

「――ッ、失態とか、そういう話じゃない！」

たまりかねたように鋭く言ったレアルードにちょっと驚く。でも、ここ数日でレアルードのそんな変化も慣れてしまっていた。

……ああ、また言葉の選択間違っちゃったか……。

「すまない、心配してくれているのは分かっている。怒らせたいわけじゃない。ただ、私は――」

続けようとした言葉は、強めのノックの音にかき消された。

どことなく張り詰めた部屋の空気にも頓着せずに軽やかな足取りで入ってきたのはタキだった。その手には胃に優しそうな食事の並んだトレイがある。

「食事のお時間ですよーっと。レアルードのは下に用意してあるか

ら行って来い。シーファは俺が見とくから、な？」

「……。……分かった」

少しの間を空けて、それでも頷いたレアルードが階下の食堂へと向かう足音を聞きながら、ちょっとだけ溜息を吐く。

耳聡くそれを聞きつけたらしいタキが、面白がってるんだか苦笑してるんだか微妙な声音で「お疲れさん」と言って、ベッド脇のテーブルに食事を並べてくれる。

「まーた頭に血ィ上ってたみたいだな、レアルードは」

「……私が言葉の選択を間違ったんだ。今日も怒らせてしまった」

「本人（レアルード）もなー……一応自覚はあるみたいだぜ？　自分の精神状態のマズさ。ただ、アンタの前になるとなけなしの冷静さが吹っ飛ぶだけで」

「……どうすれば、もう大丈夫なのだと分かってもらえるだろうか」

言葉を尽くすだけ尽くしたし、外見的にはもう健康そのもののはずだし、打てる手が思いつかない。

思わず問いかけるような呟きを漏らしてしまった私（シーファ）に、タキはあっけらかんと言う。

「とりあえずは、レアルードが納得いくまで休んどくしかないんじ

ゃね？　……ま、アレ以上に不安定にしたいなら無理に動くのは止めないけどな」

「……やはり、そうか……」

「四六時中見張られてんのはキツイだろうから、その辺はどうにかしてやるよ。レアルード（アイツ）の精神安定のためにアンタが参ったらどうしようもねぇし」

それは切実にお願いしたい。一も二もなく「頼む」と応えた私（シーファ）に、タキは軽く笑った。

それにしても……これも一種の自業自得なんだろうか。

まさかここまでレアルードがシーファに精神的に依存してるとは思わなかった。多分、『シーファ』も思ってなかっただろう。

レアルードが『魔王』を倒しに旅に出るのが運命なら、シーファがそれを導いていくのは宿命だ。表だっては無理でも、それとなく彼が『魔王』の元に辿り着けるだけの力を手に入れられるように誘導していく。

それが『シーファ』――ただ一人のエルフの末裔に課せられた、役目だった。

『魔王』を倒すためだけに『世界』に幾つもの仕掛けを施し、いつかの未来の『勇者』を定め、そうして最後に『シーファ』だけを残して絶えたエルフという種。

その集大成こそが『シーファ』で、唯一であるが故に、どこにも、誰にも続かない存在。

ただ、『勇者』――レアルードを助け導き、『魔王』を倒すためだけに存在する『シーファ』。
だからこそ、レアルードが『シーファ』に信頼や親しみを抱くのは当然で（だってそうでないと共に旅に出ることはできないから）、だけど『今』のようになることだけはこれまで無かったのに。

いくつもの要因が絡み合って、『今回』のレアルードは『シーファ』に依存してしまった。それは本当は、表に出てこないだけで、『今まで』のレアルードだって似たり寄ったりだったのかもしれないけど。

それでもこんなに早い段階でそれが発露したのは――間違いなく『私』のせいで。
やっぱり自業自得か、と、諦めの境地で溜息を吐いた。

彼のこと、彼らのこと

「――で、アイツの暴走で後回しになってたけど、魔族に会ったって？」

私（シーファ）が食事に手を付けたのを見計らって、タキが訪ねてくる。

村でレアルードの戻りを待つ間に、簡単にその辺りのことを説明していたのだ。詳細を話し終える前にレアルードが戻ってきて、その後の怒涛の展開により延ばし延ばしになっていたんだけど。

「正確には『魔王の眷属』だ」

「それがよく分かんないんだよなー。どう違うワケ？」

「『魔族』とは、魔王によって生み出されたもの。『魔』を内包し、魔王の意のままに動く。『魔王の眷属』は、自らの意思で魔王に下り、印を与えられることで魔王の配下となったもの。忠誠は誓えど、各々の意思によって動くことが多い」

「……つまり、『魔王の眷属』ってのは後天的になるものだってことでいいか？」

「そう考えてくれて構わない」

『シーファ』の記憶の中では、『魔族』と『魔王の眷属』は明確に分かたれていた。
そもそもの成り立ちからして魔王に属する『魔族』と、自ら望み、魔王がそれを受け入れることで成り立つ『魔王の眷属』。
『ジアス・アルレイド』はその中でも魔王に近い立場にあって、かなりのところを己の裁量で動いていた。『シーファ』と顔見知りなのもそれに関係する部分がある。

「へぇ……ソイツ、強いんだよな？」

「……そうだな。今回は様子見のようだったから良かったが、真っ向から手を出してきた場合、退けるのは難しいだろう」

「なるほどな……」

私（シーファ）の言葉に何やら考え込むタキをよそに、私は『シーファ』の記憶を探る。

――『ジアス・アルレイド』。
褐色の肌に浮かぶ黒色の紋様が、彼が『魔王の眷属』となった証。
琥珀によく似たその瞳が、柔らかく優しく細められたのを見たのは、『シーファ』の記憶でも遠い遠い昔のことだ。
自らの意思で『魔王』に下ることを選んだ、その理由を『シーファ』は知っている。……そして、悔やんでいた。

「まー、とりあえずはレアルードが落ち着くの待つしかないか。今のままじゃロクに動けもしねぇしな」

「……すまない」

「アンタが謝ることでもねぇだろ。――それより、ちょっと質問していい？」

タキの声のトーンが変わって、私は反射的に身構える。……なんかイヤな予感。

無言のまま促すと、タキは油断のならない笑みを浮かべて、言った。

「アンタの異常な回復速度の理由、聞き忘れてたなーって思ってさ」

……ですよねー。そうきますよね訊いちゃいますよね。
忘れててくれないかなとか気付かなかったフリしてくれないかなとか思ったんだけど、そうはいかないよねやっぱり。

「自分自身に魔法が使えないってんなら、アレは魔法によるモノじゃないってことだろ？　だったらなんか他の理由があるんだよな？」

これだからタキと一対一になるのは怖い。ちょっと気を緩めた頃にひょいっと心臓に悪い質問をしてくるから。

「――その通りだ。ただ、答えは恐らく君の意には沿わない」

「意に沿わないって？」

「どうということのない理由だ。君の知的好奇心を満たすような答えではない」

「別に好奇心だけで訊いてるんじゃないんだけどな。ま、いいから言ってみろって」

あっさり続きを促してくるタキに内心溜息を吐きつつ、答えることにする。引き延ばす答えでもないし。

「体質だ」

「……」

呆気にとられたように無言になるタキ。

……うう、居心地悪い。でも一応本当のことだから仕方ない。だって究極的には体質って言う他ないんだよね、これ。

「……体質？」

確認するように繰り返したタキに頷けば、彼はどういう表情を浮かべるべきか迷った挙句に失敗したような、微妙な顔になった。

「それで納得すると思ってるワケ？」

「納得してもらうしかない。私には他の答えなど用意できない」

『シーファ』がエルフであることを明かすか否か、悩むところなのは確かだ。

『シーファ』がタキにそれを明かすタイミングは、その時々によって違っていた。旅が中盤に差し掛からないうちに明かすこともあれば、『魔王』と相対する終盤まで明かさないこともあった。

……でも、『シーファ』はあんまり『エルフ』であることを仲間に知らせたくないみたいだったから、私もできれば知らせたくない。

そういう私の迷いを察したのか、そうじゃないのか――分からないけど、タキはそれ以上の追及は諦めたみたいだった。

助かった……けど、ちょっと違和感を覚える。『シーファ』の記憶にあるより、タキが友好的というかなんというか……。よく考えれば、こうやってレームの町で足止めされてる時点で見切りをつけられてもおかしくないと思うんだけど。

確かに『私』は『シーファ』の記憶の中のタキを知ってるだけで、今回の『タキ』をよく知ってるわけじゃない。だからその思考回路

だって完璧に読めるなんてことはないんだけど、それにしたって違和感は拭えない。

レアルードに引き続いてタキまで変化があるとなると、『シーファ』の中身が『私』だからってだけじゃ説明がつかないような気がするんだけど、どうなんだろう。特にタキはレアルードと違って仲間になるまで私（シーファ）とは接触が無いわけだし。

……まあ、こうやって考えてても答えが出るわけじゃないんだけど。

レアルードのことはともかく、タキが友好的なのは別に悪いことじゃないし、とりあえず目先の問題をどうにかしないとだよね。

「――そういえば、ピアはどうしている？」

ふと思い出して訊いてみる。

ピアもまたこの宿の別室に部屋をとっていて、隙あらばレアルードを部屋に招こうとしていた。毎回断られてるけど諦める様子はない。

怖い思いをしただろうから、精神的ショックとか大丈夫かなと思ってたんだけど、思ったよりタフだったみたいだ。

でも今日はまだレアルードを誘いに来てなかったから、姿を見ていない。だから気になったんだけど。

「レアルードの食事用意してたら横からぶんどってって机に並べてたから、今頃一緒に食べてるんじゃねぇの？」

「……そ、そうか」

ぶんどって、って……ある意味すごいよピア。そのバイタリティに敬服するよ。一応健気って言っていいのかなこれ。

ピアがレアルードに気があるっていうのは、もうほとんど確信に近い。

っていうかあれだけあからさまなのに気付かない方がおかしい。現にタキはその辺わかってちょっと面白がってるみたいだし。

……なのにレアルードは相変わらずなんだよねぇ……。

鈍すぎて気付いてないのかと思ってたんだけど、もしかしたら単純に興味がないのかもしれないとここ最近で思い始めた。あんな可愛い子なのにもったいない、と思うけど、まあ人それぞれだよね。

「ああ、あともう一個訊いときたいことがあったんだけど」

「……何だ」

ちょっと警戒しちゃうのは仕方ない。タキってわりと遠慮なくつっこんでくるし。一応空気読んでくれる時もあるけど。

「アンタの身体に描かれてるのって、何？」

さらりと言われたその質問の内容に、一瞬思考が止まった。

私（シーファ）の身体に描かれてるもの、って言えば、それが示すのは一つしかない。あの、魔法陣のような黒い文様。

だけど、あれは。

――タキの目に映るはずがなかったのに、どうして。

これもまた、『変化』のひとつとでも言うのだろうか。でもあれは、その人の『素養』によって見えるか否かが決まる。だから『私』が『シーファ』であることは関係ないはずだ。

考えろ――否、『思い出せ』。恐らく『シーファ』は知っている。その理由を。

――流れの剣士。『証』持ちの双剣使い。稀な赤髪金瞳により、売られた過去を持つ青年。『旅』が進めば『魔法剣士』であることが明かされる人物。

記憶を浚う。改めて認識するとびっくりな知識もあったけど、今求めているのはそれじゃない。

――タキの魔法素養は後天的なもの。元々潜在していた『世界干渉力』の代わりに『彼』が与えた――

辿り着く。
辿り着いてしまった、その『知識』に、ひゅっと息を呑む。
いきなり顔色を変えた私（シーファ）を何事かとタキが注視しているのを感じながらも、私は何も反応を返せない。

タキの赤い髪と金色の瞳の組み合わせ。『シーファ』の記憶の中でも一人しか存在しないその理由。
――それから、似て非なる組み合わせを持つ、『彼』のこと。その、関係性。

出会った瞬間にその人にまつわる情報を――『知識』を余すところなく『思い出せる』なら、こんな驚愕に襲われることなんてなかっただろう。

……ああ、だから。あんなにも『シーファ』は悔やんでいた。
自分（シーファ）の『運命』を知ったことで、彼がその道を選んだからだけじゃなくて。
――血を分けた兄弟が、敵対する宿命を負ったことに責任を感じたからこそ、あれほど悔やんだ。
たとえ当人が、それを是としたのだとしても。

一度目の旅。全ての始まりとなったその旅の中では、純粋な後方支援として仲間に加わった『魔法』の使い手。純粋な魔法ではなく、それによく似せた異能を揮う『魔法使い』。

黒によく似た色彩と、その身に宿した異能のために、タキよりも早くに売られていった――正真正銘血を分けた兄なのだと旅の最中に判明したその人物こそ。

後に自ら望んで『魔王の眷属』となった――『ジアス・アルレイド』だった。

再びの『対話』

「おい、……おい、シーファ？」

軽く肩を揺さぶられ、ハッと我に返る。どうやら茫然自失状態だったらしい。

「やっぱまだ体調戻ってないのか？　――それとも、オレが訊いたのってンなマズい事だったか？」

「……」

問題があるか否かで言えば、特に問題はない。でも、あの黒い文様が見えることの意味を言ってしまっていいのか、私には判断ができない。

これまで『シーファ』が繰り返した旅の中、タキが保持したままだったことは無かった『世界干渉力』。それが、今回に限って残されている、その理由が分からないから。

どうして、と訊ける人はここに居ない。答えられるのはきっと、『ジアス・アルレイド』だけなのに。

「――いつか、」

気付けば、ぽろりと言葉が口をついて出ていた。

「いつか、話す。それでは、駄目だろうか」

タキがちょっと驚いたような、意外そうな顔をするのが視界に映る。

ここはさらっと躱すところだったんじゃないかって思っても後の祭りだ。口にした言葉は戻らない。

内心焦っていたら、タキは何だか困ったみたいに小さく溜息を吐いた。

「ンな顔して言われて、ダメだとか言ったらオレ冷血人間決定だろ？　ワケありだろーなってのは分かってるから、アンタがいいって思ったら教えてくれればいいって」

……『ンな顔』って、一体どんな顔してたんだろう、私（シーファ）。ほとんど無意識だったから分かんないけど、よっぽど哀れっぽい顔だったんだろうか。

「ほら、メシ冷めるし、とりあえず食っちまえよ。……レアルードに見られながらメシ食うの、イヤだろ？」

その言葉にここ数日で嫌というほど晒されたレアルードの視線を思い出して、私は慌てて食事の手を早めた。

……いやだって、ガン見とかいうレベルじゃなく見られながら食べるのって苦行もいいところなんだよ！　味もろくに分からなくなって砂噛んでるような気分になるんだよ……！

＊　＊　＊

食べ終えてタキと話してる時にレアルードが戻ってきて、タキがうまい具合にレアルードを誘導して四六時中監視状態からは脱却できることになって、一安心してベッドに沈み込んで。

……そして今、私は覚えのある場所に居る。場所、と言っていいものかどうかはちょっと怪しいけど。

真っ暗で自分の身体も見えない、感覚さえも危うい空間――『シーファ』と言葉を交わした空間に。

「これって、この間の、だよね……？」

呟いた声が『私』のものだったから、それはほぼ確信に変わる。

『シーファ』の声は聞こえない。銀色の文字も見えない。でも、

なんとなく、『居る』んじゃないか――『繋がって』るんじゃないかと思った。

「シーファ？　……聞こえる？」

呼びかければ『シーファ』に聞こえるだろうと殆ど確信してたけど、これで返事がなかったらイタイ人だ。
反応を待つ間が、ものすごく長く感じた。……いろんな意味で。

【聞　えて　る】

応えがあってほっとする。
……でもやっぱりちょっとホラー風味だ。安定してないってことなんだろう。

「聞きたいことがあるんだけど……」

【君が訊　としている事は　見当　ついている】

少しずつ、少しずつ。『シーファ』の声――脳裏に閃く銀色の文字が、明瞭になっていく。

【『ジアス・アルレイド』――それ　ら、彼の兄弟　あるタキにつ

いて　ろう】

「――あと、レアルードについても。ああなっちゃったのって、私のせいなのかな」

傍から見て『異常』に足を踏み入れ始めているレアルードの様子が気になって付け加えると、シーファは言葉に迷うみたいに間を空けて、それから答えた。

【君の抱く疑問の殆どは、究極的にはある一点を説明すれば事足りる。だが、それを君に教えることは、まだ出来ない】

「……どういうこと？」

【それを説明することが、君と、君の周りに危険をもたらす可能性が高いからだ】

『私』が知るだけで、私にも私の周り――多分これはレアルードとかタキとかのことだと思うけど――にも危険をもたらすって……どういうことなんだろう。

更に疑問は膨らむけど、シーファはそれが答えの代わりだとでも言うように、その内容については触れずに言葉を続ける。

【君には何一つ責はない。レアルードの変化も気にしなくていい。あの状態は長くは続かない】

「じゃあ、元に戻るの？」

【君が言う『元』がどこにあるかに寄るが、少なくとも目的を見失った状態からは脱するだろう】

レアルードの目的っていうと、イコール旅の目的――『魔王』を倒すこと、だよね。

確かに旅の仲間（シーファ）を気遣いすぎて、旅どころか全く移動してないのは『目的を見失った状態』って言えるかもしれない。

【それから、『世界干渉力』をタキが保持したままだったことについてだが、……真意はジアスにしか分からない。ただ――】

「……ただ？」

【……ジアスもまた、何かを為そうとしているのかもしれない。私が君を巻き込んだように、タキに『世界干渉力』を残すことによって】

……『何かを為す』。

『何か』って、なんだろう。タキが『世界干渉力』を持ってることで起こる変化が、それに影響を与えるんだとしたら――。

……。

……うん、駄目だ。さっぱり分からない。そもそも『シーファ』

が分からないことを『私』が分かるはずもない。

思考を打ち切って、シーファに別の話題を向けようとしたところで――『私』を『巻き込んで』、シーファが為したいことが何なのか、知らないことに気付いた。

え、今更？　って自分でも思った。うっかりっていうレベルじゃないよねこれ。ちょっと落ち込む。いやでも状況についていくので精一杯だったし……。

『私』がやること自体は分かってたから深く考えたことなかったけど、そもそも『シーファ』が何を考えてこんなことをしたのか――『記憶』を探ってもよく分からない。

『私』＝『シーファ』の状態で『魔王』の元に行く。

それが最終的な目標というか、そのために入れ替わりを行ったのは分かってるんだけど。

それがどういう意味を持つのかが、分からない。

「……あの、シーファ」

【……？　何だろうか】

「シーファは、何をしたくて、『チェンジリング』の魔法を使ったの？」

とりあえず気になったので、直球で訊いてみる。

『私』と『シーファ』の精神を入れ替える――それを為したのは『チェンジリング』の魔法だ。シーファオリジナルの『魔法』らしい、というのは『記憶』から分かる。

そもそも世界の枠を越える『魔法』っていうのはほぼ無い。そんな事象を起こせる力を持つ人自体が皆無に近いからだ。つまり『シーファ』はレア中のレアみたいな感じ。なんせ唯一のエルフだし。エルフの中でもずば抜けた『世界干渉力』を持ってるらしいし。

姿は見えないけど、シーファが何だか困ってる――緊張してる（？）みたいなのが伝わってくる。

……そんな難しい質問、してないよね？　それともこれも『説明できない』ことに関わってるんだろうか。

だけど、しばらくの沈黙の後、シーファは一番初めに聞いた、あの悲痛な声を思い出させるような声音で、答えた。

【……終わらせたかった、からだ】

【どんな手を使っても、悲願を果たさねばならなかった】

【その結果、君を巻き込むことになってしまったのは、申し訳ないと思っている】

「あ、いや、別に責めてるわけじゃ……」

なんだかシーファの声音が沈んできたので、慌ててフォローを入

れようとしたんだけど。

【すまない。――それでも、私は、】

【これ以外に、　けられ　を解く　法を、　けられな　た】

全部言い切る前に、思い詰めたみたいなシーファの声が閃いて――途切れて、しまった。

……唐突に切れるのは仕様なんだろうか。シーファにもいつ繋がりが途切れるのかは分からないっぽいけど。別れの挨拶とかこれから先もできなさそうだ。

またあの血の色の文字が現れるんじゃないかとドキドキしたけど、今回はシーファの気配はなくなったものの、空間自体はそのままだった。別の何かが現れる気配もない。……多分。

それにしても、シーファの答えはどういうことなんだろう。

『終わらせたかった』――これは多分、シーファの『記憶』にある『繰り返し』のことだろう。何度も何度も繰り返す『旅』を終わらせたかった、って考えるのが妥当だと思う。

『どんな手を使っても』は、私を巻き込んだことだとして、『悲願を果たさねばならなかった』って……エルフの悲願、だよね？

『魔王を倒す』ことが、エルフの悲願だったと思うんだけど。

『旅』を終わらせる＝魔王を倒す――だとして、やっぱりなんで『私』が必要だったのかが分からない。その辺りの『記憶』がうまく探れないのは、やっぱりシーファが『隠して』るんだよね。

『魔王』を倒すために『私』が必要なのか、って考えると、答えはＮｏだ。だって『魔王』を倒すために必要なのは、究極的には『シーファ』だけだし、――って、え？

……あれ？　『魔王』を倒す役目を負ってるのってレアルードじゃないの？

だってレアルードはいわゆる『勇者』なわけで。『勇者』が『魔王』の元に辿り着けるようにエルフは世界に幾つも仕掛けをしていったわけで。

……ああ、そっか。『辿り着けるように』なんだ。『倒すため』に旅に出るけど、実際倒すのは『シーファ』ってことか……。いや、倒せなかったわけだけど。

そう、『倒せなかった』。その事実は『記憶』にある。でも、そこで何が起こったのか――起こるのかは分からない。
ってことは、その『記憶』が私に知られるとマズいってことなんだろう。
それが多分、『説明できない』って言ったことにも関わってる。

……うーん、これって多分深く考えないでいた方がいいんだろうけど、気になるなぁ……。

今度『繋がった』ら、こうやって考えるのがセーフなのかアウトなのかは訊かないと。

あ、そういえばこの間の最後、何て言ったかも訊いておけばよかった。忠告って言ってたし、確認しておいた方がいいよね。

でもいざ会話するってなると忘れそう。メモ帳とかこの空間に持ち込めればいいのに。

まあ夢（？）だし無理ですよね分かってる。そもそも私が忘れなきゃいい話だよね……。

積もりゆく『違い』

――夢を見た。

『シーファ』と話したあの空間のことじゃなくて、純粋な『夢』。

……いやもしかしたら違うかもしれない。『私』が『シーファ』だったけれど、あれは多分――『シーファ』の記憶にある情景を『夢』の形で見たんだろう。

暗い――四方が淡く光る石で囲まれた小さな部屋のような場所。中心に祭壇のようなものがあって、その前に立ったシーファの隣には『ジアス』が居た。

いつになく真剣な表情のジアスが、目を合わせないシーファに苛立って、肩を掴んで無理やり向き合わせて、だけどシーファは相変わらずの無表情で、ジアスの苛立ちの理由にも頓着しない様子で、それがますますジアスを苛立たせて――そして諦めさせた。

それは二人が『仲間』だった頃の、記憶の一欠片。

ジアスが『魔王の眷属』ではなかった頃の、『旅』の一部。

＊　＊　＊

「……本当に、大丈夫か？」

「そう何度も確認しなくても大丈夫だ。レアルードこそ、ピアを頼む」

「ったく、過保護っつーのも飽きたっての。大丈夫だって言ってんだろ？　念のため回復専門のヤツに診てもらった方が良いってのはアンタだって納得しただろーが」

「それは、そうだが――やっぱり、俺も、」

「付き添いは『教会』に顔の利くタキの方が適任だろう。ピアを一人残すのも問題だし、全員で向かうほどのことでもない。そう長い時間ではないから、待っていてくれ」

「……お前がそう言うなら」

レームの町の『教会』にタキと二人で向かうことになってから、何度も何度も何度も飽きるくらい繰り返したやりとりに内心溜息を吐く。飽きるくらいって言うか飽きた。

『教会』には所属の魔法使い――『証』持ちとは別に『教会』そのものに帰属する人が結構いるんだけど、そのうちの回復魔法（シーファ）に精通した人たちはお医者さんみたいなこともしてたりする。私の身体の方はもう全然問題ないんだけど、本当に全く問題ないってことをレアルードに納得してもらうためのデモンストレーションというかそんな感じで、一度『教会』で診てもらうことになったのだ。

一見レアルードが付き添いじゃないと意味がないっぽいけど、診断証明書的なものもあるらしいのでそんなことはない。

というわけで、タキと二人、町の中央部にある『教会』へと向か

ったわけだけど。

「……タキ」

「ん？　どうした、疲れたか？」

「いや、それは私の台詞ではないかと思うが。……この町はこんなに治安が悪かったか？」

周囲の惨憺たる有様をあえて見ないようにしつつ訊ねた私（シーファ）に、無謀にも私（シーファ）とタキを捕まえて売り物にしようと近付いてきた集団の最後の一人を容赦なく殴り倒しながら、タキは軽い口調で答えた。

「いいや？　確かに規模の分だけガラ悪ィのも結構いるけど、言うほどじゃなかったハズだぜ？」

「では何故、先程から絡まれ続けているんだろうか。明らかに頻度がおかしいと思うんだが」

今回とった宿は『記憶』にあるよりグレードの高いところで、つまり町の中でも治安の良い区域にあるはずで、ほどよく中心部寄りで『教会』までの距離だって格段に短くなってるはず、だったんだけど。

『教会』への道行の半分もいかない間に、タキが実力にモノを言わせて追い払った風体のよろしくないオニイサン方の数は、もう両手両足の指じゃきかない数だったりする。

それはもう、角を曲がる度に新手がこんにちはするレベル。このエンカウント率おかしいって絶対。

『シーファ』の繰り返した『旅』の中では、このレームの町は割合長く滞在する場所だった。

だからこそ、大体の治安とかわかってるつもりだったし、何度か『私』が宿から出た時（レアルード付きだったけど）に観察した限りでは、アンダーグラウンドの住人っぽい人はこんなにうじゃうじゃいなかった。本当どこから湧いてきたんだろうこの人たち。

「ん―……多分アレじゃね？」

「『アレ』とは」

「アンタもオレも、金持ってそうだし高く売れそうだし、一石二鳥の金ヅルに見えんだろ。パッと見あんま強そうにも見えねーだろうし」

……言われてみれば確かに。

私（シーファ）は言わずもがな、カミサマ気合い入れすぎたんですか傑作なんですかな感じの線の細い美形だし、タキも希少な色彩持ちで外見も整ってるってことで売り物にするにはうってつけだろう。

そして私（シーファ）は前衛タイプじゃないから見た目無力っぽいし、タキは一応剣提げてるけどどっちかというと細身だ。よくよく観察すると身のこなしが常人じゃないのがわかるけど、それに気付かなければ多人数でかかれば何とかなると思われても仕方がないのかもしれない。

でもレアルード付きで外出した時はこんなんじゃなかったのに……レアルードがどこからどう見ても前衛でガタイもいいから、はからずしも抑止力になったとかそういう感じなんだろうか。あと今回はカモが複数ってことでの相乗効果？

その後もやっぱりどこからか湧いてくる裏社会の住人っぽい方々をタキが主に拳で黙らせつつ、なんとか辿り着いた『教会』は、『シーファ』の記憶にある通りの壮麗な建物だった。

派手だとか華美だとかまではいかないけど、明らかに建築の水準が違う。お金と技術がふんだんに使われてるんだろうなって分かるような外観。

『教会』に馴染みのない人ならちょっとばかり踏み入るのに勇気が要るって言ってもおかしくない感じだけど、タキは全く歩みを緩めることなく扉を開いて私（シーファ）を中へと誘う。

……いや、私（シーファ）だって、『記憶』の上では何度も何度も入ってるわけだし、別にいいんだけど。

ただ、なんか違和感……あ、そっか。

『シーファ』が辿った道筋だと、ここに来るのってタキとじゃなくて、レアルードとだからだ。

タキの勧めで幾つか依頼受けて、腕試しとお金貯めるのと一挙にやろうってことになるんだよね。タキは先に『教会』に顔出しに行ってたから、タキがこうして『教会』の外で待ってくれてるの見るのが初めてなんだ。

タキの勧めで『教会』を訪れるっていうのはどの『旅』でも同じみたいだから、不可避イベントの一種なんだろうけど……装備とか

整えるためのお金稼ぐのと経験値的なもの稼ぐのと、他に何かここじゃないとダメな理由あったよね。

頑張れ私思い出せ私、絶対なんか重要イベントだったはずだから……！　せめて心の準備してから入りたい。場当たり的に『記憶』思い出すのは勘弁……！

「――入り口で立ち止まって、どうかされましたか？　……って、タキ？」

涼やかな声が屋内から聞こえて、それから少しだけ驚いた風にタキの名を呼んで。

そして私は『思い出す』。

いつも笑みを絶やさない、穏やかな『彼』のことを。

「――……『シュウ』」

浮かぶ名前、穏やかな笑顔。少し真面目が過ぎて、軽いノリのタキとはよく口論していた。でも仲が悪いってわけじゃなくて、むしろ昔からの知り合いだから遠慮なく言い合いができていたのだと知っている。

『シュウ』――シウメリク。

『教会』所属の魔法使い。『使徒』。

知っている。知っている。知っている。

だけどその『記憶』とはある一点が決定的に違うのだと、声を聴いた瞬間から『私』は気付いてしまっていた。そしてそれは、続くタキの言葉で疑いようもないものになる。

「――シウメイリアか。久しぶりだなー」

「それはこちらの台詞です。貴方はいつもあちこちふらふらしているから所在が把握しにくいと、主様が困っていらっしゃいました」

「そりゃ、オレは別にただの旅人だしー？　いつでも『教会』に所在把握されてるなんて気色悪い状態はごめん被るな」

「あれだけ主様に目を掛けられていながら、そんな台詞が出てくるだなんて……」

「ご期待に沿えず悪ぅございましたね、『使徒』サマ？　光栄デス、とでも言っときゃ満足だったか？」

「また貴方は、そんなふざけた物言いをして。そんなだから、他の『使徒』にやっかまれるんですよ」

いつか『シーファ』の聞いた二人の遣り取りと内容は変わらない、だけど片割れの『声』が違う。

『シウメイリア』。
知っていて、知らない人。
『シーファ』の知る『シュウ』――『シウメリク』の、死んだ双子の妹だったはずの『シウメイリア』がそこに居た。

――ああ、そうか。
『シウメリク』は『シウメイリア』を救えなかったのを悔やんでた。彼女に降りかかった運命を自分が肩代わりできていたらと、願うみたいに思い続けてた。
……それが、きっと、叶ったから。
ここに『シウメリク』はいなくて、『シウメイリア』がいて、そして『シウメリク』と同じ立ち位置で生きている。
どうして『今回』こうなったのかは、『私』には分からない。
『私』が『シーファ』であることで影響を受けるのは、あの『はじまりの日』以降の出来事のはずなのに。

『私』が在ることとは関係なしに、『記憶』とのズレが増えていく。
これは、『シーファ』も予測していたことなのか、それとも予測していなかったことなのか。
『記憶』の中にも『知識』にも答えはない。もしかしたら答えを知っているかもしれない『シーファ』も『ジアス・アルレイド』もここにはいない。

ただ、無性に。
泣きたいような、寂しいような、それでも祝福するような気持ちになったのは。
『シーファ』の記憶があるからなんだろうと、そう、思った。

変わらない『筋書き』

タキがシウメイリアに用件を告げれば、彼女はすぐに私達を奥へと案内してくれた。

「タキが他人と旅を共にするなんて」と、これまた『記憶』と相違ない台詞を告げて嬉しそうに笑ったシウメイリアに、タキはちょっと複雑な顔をしていた。多分、シウメイリアが子供の成長を喜ぶ親みたいな感じだったからだろう。

いろんな手順を省略して（タキが顔馴染み故のサービスみたいなものらしい）さくっと『診察』することになったわけだけど。

「――こんなこと、初めてです」

『心眼』で私（シーファ）を『視』たシウメイリアが、驚きに目を瞠ってそう言った。

私（シーファ）としては「やっぱり」としか思わない反応だったけど、タキは違う。「どういうことだ？」と疑問を投げた。

彼女――そして『シウメリク』の持つ『心眼』という異能は、いわゆる透視能力とか第三の目とかそんな感じのものだ。『教会』に帰属する人間は大抵が異能を持っていて、そういう人は基本的に魔法の素質なんかも高い。その例に漏れず、『心眼』を持つ人は、補

助系統の魔法に高い素養を持つ人が多かったりする。

その中でも『シウメリク』の力の強さは飛びぬけていて――つまりその立ち位置に居る『シウメイリア』もまた、強い『心眼』を持っているはずで。

だからこそ、かつて『シウメリク』が言ったのと同じ台詞を『シウメイリア』は口にしたんだろう。

繰り返した、繰り返された、そのやりとり。それは、『シウメリク』が『シウメイリア』になってもやっぱり変わらない。

「本人――シーファさんに拒絶の意思が感じられないのに、きちんと診ることができません。そもそも『視』えにくいんです。まるで、何かに阻害されているみたいに……」

「阻害？」

「靄がかっている、と言えば近いでしょうか。輪郭はぼんやりと把握できるけれど、どの部分も正確には視えないんです。――身体に問題がないことだけは確証を持って言えるのですが」

より正確に（・・・）『シーファ』のことが視えるからこその台詞。

あと少しでも力が弱ければ、『シーファ』に都合のいい情報だけを与えられるだけで終わっていただろう。他の人を視るときと同じようにきちんと視えたのだと認識させられて、何も不思議に思うことなく。

……こういうイベント（？）を毎回繰り返してたことを考えると、割と『シーファ』って綱渡り状態だったんだなぁ……。
絶対にばれたらいけないわけじゃないけど、『エルフ』であることを隠したいなら、『普通』でない証拠が積み重なっていくのは不都合だったはずなのに。

――これも決められた『運命』のうちなら、仕方ないのかもしれないけど。

「よくわかんねーけど、とりあえずシーファは健康体ってことでいいんだな？」

「はい。……というか、話を聞いたところでは、それは確定していたのではないのですか？」

「まー、見たトコ回復してんだろーとは思ったし、本人の申告もあったけど、イマイチ信用ならなかったんだって」

あっけらかんと言うタキ。

……それってつまり、レアルードだけじゃなくてタキも私（シーファ）の言葉信じてなかったってことだよね……？
そんなに私（シーファ）って無理しそうに見えるのかな。確かに元気溌剌とかそういうタイプじゃないから、完全回復したとしてもあんまり分からないかもしれないけど。

でもまあ、これで当初の目的である『レアルードを納得させるた

めのデモンストレーション』は完了だ。
あとは証明書（っぽいもの）を出してもらえばそれでＯＫ。……なんだけど。

それだけじゃすまないんだろうなぁ、っていうのは、『記憶』から分かっていた。

過程が違っても、同行者が少なくなっててても、『筋書き』は変わらない。
定められた『旅』が繰り返される、この現象が終わらない限り、それは絶対のことだ。

案の定、シウメイリアは、快く診断書（のようなもの）を作った後、『シーファ』の記憶にある『シウメリク』と同じ話を切り出した。

「――実は、タキに頼みたい仕事があるんですが」

「またか？　『使徒』サマ達は何してんだよ。『与えられた力で以て世界に尽くす』のが『教会』の教義じゃありませんでしたかねー？」

「……嫌味を言わないでください。あとその教義の解釈は大分簡略化されていますよ。本来の意味は――」

「アンタと『教会』の教義について議論する気はねえっての。ンで？　頼みたい仕事って何だ？　事と次第によっちゃ引き受けないでもないけど」

にやにやと笑いながら言ったタキに、シウメイリアは眉間に皺を寄せる。ちょっと機嫌が傾いたらしい。
真面目な話っぽいのに、相手に全く真剣味が感じられなければ不機嫌にもなるよね。

……そういえばここ数日タキのデフォルトっぽいにやにや顔がご無沙汰気味だったのはもしかして私を心配してたからとか――じゃないよね違うよねそうであってください。
『旅』を繰り返している自覚のある私はともかく、タキもレアルードも『旅』による信頼関係とか情とか絆とかそれ的なものの『積み重ね』はまるっとなかったことになってるんだから、そこまで心配されてると逆に怖い。なんかイレギュラーな力が働いてるとしか思えなくなる。

いや、『私』が『シーファ』であるってこと自体イレギュラーなわけだけど、それとは全く関係ない部分に変化があるのは困るし、……怖い。
その『記憶』との乖離が気にしなくていいレベルのものなのかそうじゃないのか、『私』じゃほとんど判断できないから。
もっと詳しく『記憶』を探れば、ある程度の判断はつくんだろうけど……そこまでするとなんかまたベッドに逆戻りするハメになりそうな気がものすごくする。多分『私』じゃ処理しきれない。

とか考えてるうちにタキに頼みたいお仕事についての説明が終わっていた。聞き流してたけど、『シーファ』の記憶にある内容とは変わりない感じだったのでとりあえず安心する。
シウメイリア――『記憶』では『シウメリク』経由でタキへと回

ってきたお仕事の内容は、簡単に言えば調査依頼だ。近くの森に異常の兆候が見られるから、その原因を軽く探ってほしい、みたいな感じの。

『シーファ』の記憶では、この会話が為されるのはパーティメンバーで幾つかの依頼をこなした後だったんだけど、イレギュラーな流れ（主にレアルードの暴走による）を引き継いだ結果、色々段階をすっ飛ばしてしまったらしい。

……この『お仕事』、わりと重要と言うか、後々に響いてくるものだったと思うんだけど、『記憶』通りの流れになってくれるのかちょっと心配になる。

「――引き受けて、もらえますか？」

「……んー。どうすっかなー」

お仕事モードなのかこれが地なのか（『シウメリク』のことを考えると地なんだろう）かなり真剣な様子のシウメイリアに対して、タキはどこまでも軽い。

その二人がそれぞれ違うタイミングでちらりと視線を向けてくるのに、内心苦笑する。

タキが返答を渋るのが私（シーファ）を始めとする『仲間』ができたことによるものだと思ってるシウメイリアと、どうせなら仲間全員で仕事に当たった方が色々と都合がいいけどどうしようかと考えてるタキと。

『記憶』と同じ流れを汲んでいれば、私達（シーファ）もある程度の評価というか実績がある状態だから話は簡単だったんだけど、あいにくと今回は違う。

タキがごり押しすれば私達（シーファ）を巻き込む、というか仕事に参加させる許可を得ることはできるだろうけど、タキはそういうことをするタイプじゃない。――きっと、『嫌な予感』もしていることだろうし。

『記憶』に近い流れにするために口を出すか、全面的にタキの判断に任せてしまうか。

私が答えを出す前に、タキは考えをまとめたらしかった。

「それ、期限とかあんの？」

「いえ、明確なものは。これは民間からの依頼ではなく、『教会』発のものですし。ただ、念のための調査とはいえ、不確定要素を放置しておくわけにもいきませんから、早い方が良いのは確かですが」

「ナルホドね。んじゃ、ちょっと保留にしてもいいか？」

「……保留、ですか？」

タキの言葉に、シウメイリアは不思議そうな顔をする。

即断即決タイプのタキにしては珍しい返答だったからだろう。『シーファ』の記憶の中でも、タキが答えとか選択を保留にしたことはほぼ皆無みたいだったし。

「そ。一応オレ、今は長期の単独行動はちょっと、な立場だし。不確定要素の多いとこに無計画に突っ込みたくないんだよな」

「……受けるのが難しいようなら、どうにか他に回しますが……」
「いや、難しいわけじゃないんだって。どっちかっつうと簡単な方だし。ただ、せっかくなら――」

言いながら伸ばされた手が、成り行きを傍観してた私（シーファ）を軽く引き寄せる。そのまま肩に手を回されて、タキの隣に並ばされた。
……別に引き寄せる意味ないよねこれ。視線で示すだけでいいと思うんだけど。

「『仲間』と受けたいと思って。別に『証』持ちじゃないといけないようなのじゃないだろ、今回のって」
「――ああ、そういうことですか。確かにこれは、『証』持ちに限定しないとならないものではありませんから、貴方が望むのなら構いませんが。『教会』が自発的に行うものなので、融通の利く貴方に依頼をしたというだけですし」
「だと思った。……んじゃ、他の奴ら――『仲間』と幾つか表に出てる依頼こなして一応の実績残したら、正式依頼として回してもらえるか？　……シーファ、いいよな？」

空気を読んで無言のままでいたんだけど、意見を聞かれたからには答えないわけにはいかない。
でも訊くの遅いと思うよタキ。ほぼ決定事項だったよね今の流れ。いや別に私としては都合がいいんだけど、ちょっとどうなのと思わないでもない。

「別に私は構わないが――一応、レアルードやピアの意見も聞くべきだろう」

「アンタがいいなら大丈夫だろ」

「……それは、どういう意味だ」

「アンタがいいって言ったならレアルードも間違いなくいいって言うだろうし、レアルードがそう言えばピアも反対はしないだろうって意味。……分かってんだろ？」

にやりと人の悪い笑みを浮かべたタキに、思わず深く溜息を吐いてしまったのは――まあ、仕方ないことだと思う。うん。

防具屋にて

タキの予想通り、『教会』からの依頼を受けることに対して、レアルードからもピアからも反対意見は出なかった。
『シーファ』が繰り返していた『旅』のことを考えればいいことなんだろうけど、何だか微妙な気持ちになってしまったのは仕方ない。

さすがに『教会』お墨付きで健康体なことが証明されたので、レアルードの私（シーファ）の体調についての疑惑はなくなった……と思う。ちょっと曖昧な言い方になるのは、レアルードの過保護っぷりが微妙に残ったままだからだ。まあ、許容範囲かな、とは思うけど。
元々パーティメンバーってことで殆どの行動は一緒になるわけだし、部屋から出してもらえないとかそういうのさえなければ別にいいんじゃないかと思う。
ちょっと感覚麻痺してるんじゃないかと思わないでもないけど、今まで『シーファ』が繰り返した旅でも、距離感としてはこんなものだったみたいだし。

で、とりあえず『教会』の依頼を受けることは決定なわけだけど、その前に『教会』に実績を示さないとならないわけで。
そのための一般向けの『依頼』の物色にタキが行って、私（シーファ）とレアルードとピアはひとまず入用なもの――装備とかを道具とかそういうもの――を充実させるために買い物に繰り出したわけだけど。

「ねぇ、レアルードっ！　これどうかな？」

「いいんじゃないか」

「じゃあ、これは？」

「いいんじゃないか」

どうしよう、ものすごく居た堪れない……！

服と防具を売ってる店で、ピアが商品を手にとってはレアルードの意見を聞いてるんだけど、明らかにレアルードの対応が適当だ。さっきから聞いてると、ほぼ「いいんじゃないか」しか言ってない。

露出度が高かったり、デザイン可愛いけどそれただの布だよね、なものだったり――防具として機能しなさそうなものを示した時だけ、「それは戦闘向きじゃないだろう」とか言ってたけど。

……私は改めて買う必要がない装備なので、傍観しつつ、軽く店内を見回ったりしていた。でも正直、ここに居合わせる必要ないよね？

別に新しく装備を買ってもいいんだけど、今私（シーファ）が着てるのは魔法耐性に優れたローブ（エルフ特製）なのだ。

更に『シーファ』が色々細工して、物理耐性の効果もつけようと思えばつけられるという、旅の始まりから終わりまでぶっ通しで使ってもいいような、バランスブレイカーな代物だ。なんと言っても意思一つで耐性を最高値まで上げられるとかいう恐ろしい性能を持っている。

さすがに旅のしょっぱなからそんなもの着てると変なので、段階

的に改造するのが常だったみたいなんだけど、どうやら『私』のために先回りして細工しておいてくれたらしい。有難い。

というわけで私に装備の新調は必要ないんだけど、レアルードとピアは違う。

特にピアはただでさえ物理耐性というか防御力というか、そういうの無いし。いや『シーファ』もだけど、異常な回復力があるので多少はマシだ。

でもピアはただの人間だし、レアルードみたいに『勇者』としての特典みたいなのもないし――って、じゃあなんでピアは旅についてきたんだろう。今更過ぎるけど、気になる。

やっぱりレアルードを慕ってたからとかそんな感じなのかな。そのために弓とか覚えたんならすごい。

「じゃ、じゃあ、これは？」

「いいんじゃないか」

「……」

「……」

ぼんやり思考に耽ってたら、なんだかピアとレアルードの間の空気が微妙なものになっていた。

まあ、あの調子で会話してたのなら当然だと思う。彼女の買い物に付き合わされて意見求められるけど興味のない彼氏、みたいな構図だったもんね……。

むう、と頬を膨らませたピアは、ずいっとレアルードに接近する。結構な身長差から、上目遣いになるのは必然だ。大抵の男ならコロッといきそうな可愛さ全開で、甘えるように口を開く。

「やっぱり、レアルードが選んで？」

「……選ぶ？　俺が？」

眉を顰めたレアルードにも怯まずに、ピアは頷いた。

「うん。レアルードはこういうの、選ぶの慣れてるでしょ？　だから、お願いっ！」

傍から見ているとお見事としか言いようがない完璧な笑顔を浮かべたピアに、レアルードは。

「自分の身を守るものを、他人の手で選ばせるのはおかしいんじゃないか」

まったくもって空気を読まない発言で、周囲の空気を凍りつかせた。

私（シーファ）だけじゃない。カウンター（っぽいもの）の向こうにいる店主も、店内の他のお客さんも、この遣り取りの行く末がどうなるか窺っている気配がする。

……うん、見目の良い二人組があんな会話してたら気になるよね。しかも男の方が明らかに空気読んでなかったら尚更ね……。

とりあえず近くにいると何だかマズイことになりそうな気がしたので、こそこそと店の隅に移動する。ここならレアルードからもピアからも見えないだろう、というところで足を止めた。すると。

……うわぁ、なんでこんなところに。

かろうじて口に出すことは阻止したけど、誰彼構わずこんなところに放置している責任を問いたい気分になる物がそこにあった。

真っ黒い、光を反射するのではなく飲み込むような、深い深い漆黒の――腕輪。

オシャレに言えばブレスレットだけど、その物体の由来――もとい正体を知ってるので、間違ってもオシャレになんて言いたくない。飾り気のない、シンプルなそれは、一見ただの装飾具だ。だけどそうじゃないんだと『シーファ』の記憶が告げてくる。

――それは『魔剣』。

いつか必ず『旅』のどこかで、レアルードの持つ『聖剣』と刃を交える、呪われた剣。

本当に何でこんなところにひょいっと現れちゃってるんだろうこれ。今までの『旅』だと魔剣に憑かれた人間が『聖剣』に惹かれて現れてそのまま戦闘、って形だったけど……。

好奇心で値段を確認してみる。……いわゆる二束三文って感じだった。

なるほど、特に何の効果もない腕輪だからこの値段なのか。そして『魔剣』に都合のいい人間を引き寄せて買わせて駒にする、と。……本当、胸糞悪い仕掛けだことで。

見つけてしまったからには放置しておくのも憚られる。『旅』において、『魔剣』と『聖剣』の対峙はそこまで重要イベントではなかったはずだ。あえて言うなら『聖剣』の誕生秘話に関わる程度で。

でもその辺りのことなら、タイミングを見て私(シーファ)が伝えればいいんじゃないかと思うし、……何より、『魔剣』に憑かれるのは『人間』と決まってる。わかってて放置できるほど、『私』は割り切れない。

仕方なく、漆黒の腕輪を手に取って、店主の元に向かうことにする。さっさと精算して四次元ポケット――もとい荷物の奥につっこんでおくことにしよう。

そう思って歩き出した、んだけど。

……何故か壁にぶつかった。否、予想外に近くにいた人物に激突した。

恐らく胸だと思われる辺りに思いっきり顔をぶつけてたたらを踏む。

ふらついた身体を、伸びてきた手が支えてくれた。その感触に何故か覚えがある気がして、不思議に思って顔を上げる。

「……大丈夫か」

見下ろしてくるその人は、なんというか、――一言でいえば不審者だった。

長い前髪で目元は見えないし、高さのある襟で口元も見えない。全身真っ黒で大剣背負ってて、露出している部分は顔の中央部だけという徹底っぷり。

決して背が低いわけじゃない『シーファ』が思いっきり見上げないと目線（目は見えないけど）が合わないことからして、相当体格が良いことがわかる。

「大丈夫だ。すまない、気付かなかった」

しっかり自分の足で立ったのを見計らって支えていた手を離してくれるという紳士さに、『記憶』が刺激される。……多分、『シーファ』の知り合い、というか『旅』の仲間になり得る人なんだろう。

手を離した後も何故か無言で見下ろしてくるのに、『記憶』を探りつつ見返す。

声を聞いて姿を見て、それでも即座に思い出せないなら、パーティに入る頻度は低い人物だろう。その内でこの体格、恐らく獲物は重量級となると、候補は絞られる。だとすると。

――『記憶』から探り当てられた人物に、内心首を傾げる。

『魔剣』のことじゃないけど、どうしてこんなところにいるのか

分からない人物だ。

『旅』の終盤、最後の町で、運が良ければ『仲間』に入ってくれることもある――そんな程度の関わりのはずなんだけど。

そもそもいわゆるダンジョン以外で会うことが最後の最後まで無いのが『彼』だった気がするんだけど……まあいいか。考えても仕方ない。どちらにしろ、今関わるつもりもないし。

「ぶつかって、すまなかった。支えてくれてありがとう」

意識して笑みを浮かべて、『彼』の脇をすり抜けてカウンターへ。その間際、聞こえた声には、気付かないふりをして。

――気をつけろ。でないと『喰われる』ぞ。

……心配しなくても大丈夫ですよ『闇の人』。

『私（シーファ）』は『魔剣』に喰われない。喰われることなんてありはしない。……狂うことなどできない。そういうふうにできているんだから。

精算を済ませて実は魔剣な腕輪を荷物につっこみ、ピアとレアルードの様子を窺ってみれば、どうやら結局ピアは自分で自分の装備を選ぶことにしたらしかった。

レアルードはピアから離れたところで、幾つかの装備品を物色している。

ちらちら視線を向けているピアに気付いているのかいないのか――あれは多分気付いてない。もしくは完璧にスルーしてるか。

……レアルードって、ピアを旅の仲間に加えるのを決めたわりに、結構扱いが突き放した感じだよね。実はひそかに想い合っていて、とか考えてたんだけど、この様子じゃ全くなさそうだ。

どうやらピアの防具選びはまだかかりそうだし、先に道具系を揃えに行こうかな。大体必要なものはわかってるし、ある程度は私（シーファ）だけでも大丈夫だろう。

「レアルード。私は先に他の店を見ていようかと思うんだが、いいだろうか」

「……シーファ」

声を掛けて先手必勝とばかりに用件を伝えると、手に取っていた品物を戻して、レアルードが私（シーファ）に向き合った。その碧の瞳には非難によく似た感情がちらついている。

……あ、なんか却下されそうな予感。

「タキと『教会』に行ったときも随分絡まれたって聞いたぞ。一人で行動するのは危ない」

「それは、タキと二人だったからだろう。一人で目立たないように行動すれば、それほどの危険はないはずだ」

「シーファは楽観的すぎる。自分の容姿がどれくらい目立つか分かってないだろう」

いやいや、十分すぎるくらい分かってると思うんだけどな。こんな凶悪なまでに整った顔、初めて見たし。あんまりにも人間離れしてるから現実味がないのは確かだけど、目立つのは分かってる……と思う。『シーファ』自身、結構面倒な目に遭ってきたっていうのは『記憶』にあるし。

それに、『シーファ』の記憶によれば、やりようによっては結構気付かれないはずなのだ。この尋常じゃなく整った顔も、煌めく銀髪も、透き通る白い肌も。

要は存在を極力気付かせなければいい。気配を消して道の隅を歩けばそうそう気付かれない程度の技術（隠密行動のための、というのが気になるけど。必要になる事態があるってことだよね……？）を『シーファ』は身につけてるし、その知識のある『私』もそれが可能なわけで。

それに、一人で行動するのがダメだって言われるほど、自分の身を守れないわけじゃない。少なくとも絡まれても逃げるくらいのスキルはある。

……っていうのを懇切丁寧に伝えても無駄なんだろうなぁ。この様子だと。

『シーファ』の身を案じるレアルードの視線は、単独行動を許してくれそうもない強さだ。これを丸め込むのに労力を注ぐくらいなら、ピア（とレアルード）の買い物に付き合った方がまだマシだろう。

「――この界隈なら、そうそう危険な目には遭わないと思うんだが……分かった。一人で行くのは止めておく」

「分かってくれたなら、いい」

表情を緩ませるレアルードに、やっぱり内心首を傾げる。

これまでの『旅』で、ここまで心配されたことって無い。というか今回の旅に出る以前の村での生活でも無い。

『シーファ』は旅の資金集めと、一応人間らしく生活を営んでるように見せるために薬師みたいなことをしてたんだけど、そういう時は別に心配されなかったし。いや、こういう街中じゃなかったからかもしれないけど。

とりあえず、一人で行動できないとなったら、ここでの用事を早く済ませてしまうに限る。つまりピアの防具選びが終わればいいわ

けだ。
とはいえ、私がピアに助言とかしても聞き入れてもらえるのかは微妙なところだ。むしろ反発されそうな気がする。
そうとなればレアルードに協力を仰ぐのが一番の近道なわけだけど――ついさっき、内容はもっともなんだけど空気読まない発言してたしなぁ。協力してくれるだろうか。

というかそもそも、レアルードは何か買うんだろうか。一応さっきは商品を見てたみたいだけど。

ちょっと気になったので訊ねてみると、買うつもりはないとのことだった。まだ必要ないらしい。
まあ、レアルードの身に着けてる防具は、この先三つくらい町を過ぎた辺りまでは現役で大丈夫なくらいの性能（シーファの記憶より）だからいいのかな。あれもこれも買いそうな雰囲気になってるピアとは正反対っぽい。
旅は何かとお金が入用になるし、節約は大事だと思う。うん。

ゲームとかのお約束だと、新しいフィールドに辿り着く度に新装備が売られてたりしたような気がするけど、さすがにこの世界でそういうのはない。大きい町なら値段の割に質のいい防具とか武器とか売ってることもあるってくらいで。多分流通とか生産力とかの問題なんだろう。
旅が進めば、武器マニアとか防具マニアとかそんな感じの人からだったり国に行ったりで、普通には売られてないようなのも手に入れられるみたいだけど。

でもレア中のレアな武器はもう手に入ってるんだよね。私のじゃないけど。

レアルードの利き腕側に提げられている剣を見る。現状ただの荷物でしかないそれは、だけど捨てるわけにも売るわけにもいかない代物だ。

私（シーファ）の視線に気づいたレアルードが、それ――『聖剣』に軽く触れた。

「……そういえば旅に出てから『解析』してなかったな。するか？」

軽い調子でレアルードが訊いてくるのに、少しだけ考えて首を横に振る。

『解析』というのは、対外的には『聖剣』に興味があったシーファが、『魔法』によって性能やらルーツやら扱う条件やらを探ること、とかそんな感じになっている。実際やるのは『聖剣』の調整――調律？　のようなもので、性能もルーツも扱う条件も、調べるまでもなく『シーファ』は知っているんだけど。

レアルードは『聖剣』に選ばれたから『勇者』になった。でもだからって、即座に『聖剣』を扱えるかといったらそうじゃない。

『シーファ』の記憶によれば、精神負荷が凄まじいからとか何とかいう理由でまだ装備（つまり戦闘用に使用）できないらしい。ステータスが足りないから装備できない、みたいなものだろうか。

『聖剣』の名にふさわしく何やら色々規格外な力を持つ代物なわけだけど、使い手の技量が追い付いていない段階では、その力はむしろ危険極まりない。

完全に封じられてた頃ならともかく、レアルードが『選ばれた』あとはちょくちょく私（シーファ）が力の調律をしないといけないという、結構面倒な一面もある。

……まあ、暴走させたくはないから調律するのは別にいいんだけど、もっと手のかからない仕組みにすればよかったのに、と思わなくもない。魔王の元に辿り着けるようにするためには、それくらいの力が必要だったってことなんだろうけど。

剣が内包する力を自分の支配下に置いて、その流れを整える。それが『シーファ』の記憶の中での『解析』だ。

……でもどう考えても『解析』とは呼べないよねこれ。実際やってることとしては。

本当のこと言うわけにはいかないから仕方ないんだろうけど……だって聖剣を支配下に置けるって、『勇者』のレアルードでさえ無理なのに不審過ぎる。

『シーファ』には聖剣が反応しない――聖剣は選ばれたものが鞘から抜くと刀身が輝くというオプションがあったりする――としても、おかしく思われるのは避けられないだろうし。

どうでもいいけど光る剣って、奇襲には絶対的に向かないよね。まあ勇者だからそんなことしないんだろうけど。

というか何のためにそんなオプション付けたんだろう……一目見て『勇者』って分かるようにするためなのかな。……うーん、大昔のエルフの皆さんの考えは分からない……。

考え込んでたら、何やらレアルードが気遣わしげな表情になった。何故このタイミングで。

……私（シーファ）の表情って基本無表情だから、無駄に深刻に見えたんだろうか。

「……大丈夫か？」

えーと、何その脈絡のない問いかけ。いやあるのかな。
でも何に対しての問いかけなのか謎だよレアルード。もうちょっと言葉を足してくれると助かります。

普通に考えれば体調についてとかかな、と思うんだけど、ちょっと考え込んでただけで体調を心配されるほど見た目不健康そうではない……はず。
だからと言って他の何についてかも思いつかないんだけど。

でもまあわざわざ何についてかとか聞くのもアレなので、無難に笑みを返しておくことにする。ごまかし笑いとも言うけど。

「……」

納得したのかそうじゃないかは分からないものの、そのまま黙り込むレアルード。
……いや、無言は別にいいんだけど、意味ありげにじっと見つめてくるのは何なんだろう。謎すぎるよレアルード。

『シーファ』の記憶からするとこんな思わせぶりな行動するタイプじゃなかったと思うんだけどな……あの過剰なくらいの心配っぷりと何か関係があるんだろうか。さっぱり共通項は見つからないけど、なんとなくそんな気がする。まあ、関係があったからって、何の解決にもならないんだけどね……。

依頼

結局全ての買い物が終わったのは、陽も沈もうとする頃だった。これが一般的な旅人の買い物にかかる時間なのかはちょっと分からないけど、とりあえず疲れた。精神的に。

レアルードに協力を仰いでピアの防具選びは終わらせたものの、武器屋と道具屋でも似たり寄ったりなやりとりをして結構時間をロスしたし、道具屋以外はそもそも自分で見るものが無いから付き合ってるだけなわけで、正直レアルードの懸念をスルーして一人で先に進みたい気持ちに何度なったことか。……いや、防具屋での二の舞になるから口にはしなかったけど。

まあ地味に色々ありつつ、やっと『教会』に向かえたわけだけど――。

「あら、やだタキ。こんな私好みの美形どこに隠してたのよ」

「隠してねえって。言ったろ？　連れが居るってさ」

「言ったけど私好みの美形だとは聞いてないわよ。……あらでもあなた、男？　女？」

……なんで私、デキる女風の美人なお姉さんに絡まれてるんでし

ょうか。

『教会』に着いた私（とレアルードとピア）が見たのは、女の人三人と歓談してるタキだった。

女の人のうち二人は旅人（っていうか冒険者？）風の格好をしていて、残り一人はタキ含めた三人と並ぶとちょっと雰囲気が違う感じの――少なくとも荒事には向かなそうな――人だった。

私達に気付いたタキが手を挙げて声を掛けてきて、それと同時にこっちに向かってきた件の毛色の違う女の人が私の目前（シーファ）まで来たかと思うと――何故か私の肩をがしっと掴んだ。目がなんか肉食獣みたいだった。ターゲットロックオン、的な。

あんまりにも唐突な行動に反応できなかった私を尻目にその女の人とタキが交わしたのが先述の会話なわけで。

とりあえず放心してるわけにもいかないので、向けられた疑問に答えておくことにする。

「……女に見えるか？」

「――見えないわね。顔だけなら……いえ、胸さえあれば見えるのに残念だわ」

え、残念なのってそこなの？

……あ、『思い出し』た。この人、ここの『教会』常駐の『使徒』

だ。シウメイリアもそうだけど、彼女と違って魔法使いじゃない、いわゆる受付みたいなことをしてる人だったはず。

そしてなんというか微妙な気分になるしかないんだけど、このやりとりも『旅』毎に繰り返してた気がする。そうだよこの人可愛い女の子とか美人な女の人とか大好きな人だったよ。あと微妙に男嫌いだった気が。

タキと私（シーファ）は例外扱いになってたけど、『シウメリク』は微妙なラインだった。多分同じ『使徒』だったからなんだろうけど。レアルードはとある理由でちょっと対応柔らかかったけど、基本スルーされてたはず。

「ああでも男でもこんな好みの美形ならいいかも。ねえあなた、ちょっとこれからイイコトしない？」

「こら、人の仲間を会って早々に口説くな。っつーかネル、お前男ダメなんじゃなかったのかよ」

「――そうよね。つい本能に任せて口走っちゃったんだけど、いくら理想が服着て歩いてるような見た目でも男だし無理なはずよね。でもなんかイけそうな気がするのよ。どうしてかしら」

「いや訊かれても。そりゃシーファは稀に見る美形だけどな」

当事者（と言ってもいいはず）の私（シーファ）を置いて続けられる会話にも既視感を覚える。

……とりあえず女の子好き＋男嫌いの本能すごい。『シーファ』、どっちでもないからな……。

「――イイコトはしない。それと、離れてもらえないだろうか」

ある意味鋭い発言をしている間も肩を掴まれて肉薄されたままだった。さすがにこの状態は居心地悪い。

――それに、なんか背後から不穏な空気が。誰が発してるのかは自明の理なんだけど、何故。

「あら、ごめんなさい。あんまりにも目の保養だったものだからつい」

そんなことを言いつつも結構あっさりと彼女――ネルは離れてくれた。っていうか、ぶっちゃけ胸当たってましたよお姉さん。肩掴むだけじゃなくて身体も寄せてきてたから。うっかりキスしそうな距離になってたから。

軽々しくそういうことしない（対男限定だけど）って知ってるけど、一応対外的には私（シーファ）は男なので気をつけた方が良いと思います。

物理的には離れたものの相変わらず獲物を狙う肉食獣みたいな視線を向けられながら、タキに向き直る。

……わあ両手に花状態。冒険者っぽい見た目の女の人（両方美人）が両脇に控えてるような状態でにこやかに笑いかけられてもタラシにしか見えないよタキ。

……まあ、口説いてたとかじゃないっていうのは分かってるんだけど。多分情報収集のためとかだろう。

タキは女性受けがいいけど、軽々しく口説いたりはしない。軽口みたいなのはともかく。……それがタラシっぽい印象を与えるんだけど、会話を円滑にする処世術みたいなものだし仕方ないだろう。

爽やかな――ともすれば胡散臭い感じの笑顔でタキが何か言うと、二人の美人さんは軽くタキの肩を叩いてから去っていった。

なんかちょっと親しげな感じだったけど、もともと知り合いとかだったのかもしれない。シウメイリアみたいに。

ともかくも余計な人員がいなくなったのでタキと合流することにする。いやまだネルはい居るんだけど、問題はない。だって――。

「さあて、役者も揃ったようだし、お仕事といこうかしら。タキ、それからお仲間さん達、こちらへどうぞ」

言って、少し奥にあるテーブルに誘うネル。

なんかちょっと困惑した空気がレアルードとピアの方から漂ってきたけど、私は元々この流れを知っていたので戸惑うことはない。

さっさと席に着こうとしてるタキに続くようにしてテーブルに近付いた。遅れてレアルード、そしてピアの順で同じようにテーブルに向かう気配。

それぞれのネルへの認識はバラバラだろうけど、とりあえず問題なく話ができる状態になったところで、タキが口を開いた。

「紹介してなかったけど、コイツはネル。『教会』の――まあ、案内人みたいなもんか。シウメイリアの方から話通してもらって、ち

ょっと手ェ貸してもらうことになった」

「ご挨拶が遅れてごめんなさい。改めて名乗らせてもらうけれど、ネルよ。一応『教会』の『使徒』をやってるわ。少しの間でしょうけど、よろしくね」

にっこり笑ってそう言うネルに釣られるような形で、私含む残り三人も名乗る。

レアルードが名乗った時になんだかネルが少しだけ驚いてたっぽいけど、多分私以外は気付かなかっただろう。私も『記憶』で知ってなかったら見過ごしたくらいの微妙な変化だったし。

「それじゃあ早速本題といきましょうか。まずは――」

くるりとネルが指先を回す。と、そこにスクリーンのようなものが現れた。レアルードとピアが息を呑む気配がする。

「ネルは『投影』の異能持ちなんだよ。『具現』っつった方が分かり易いか？」

「これはタキの選んだ依頼の内容を映し出しているだけだから、特に危険なものじゃないわ。――だからそこの金髪のあなた、剣に手をかけるのは止めてもらえないかしら」

ネルの言葉にちらりとレアルードを見たら、本当に剣の柄に手を

かけてた。私（シーファ）の視線に気づいて離したけど。……いやいや、物騒だよレアルード。どんだけ周り警戒してるの。

「タキが選んだ依頼は四つね。二人一組の初級が二つ、団体用の中級、上級が一つずつ。ちょうどいい初級の依頼が今ちょうど無いのよ。悪いけれど我慢してちょうだい」

初級、中級、上級というのは『教会』で受けられる一般の依頼の、一番メジャーな分け方だ。

もうちょっと詳しいランク分けもあるみたいなんだけど、一般向けに開放されてるのだったら大体この三段階で分ければ問題ない。

初級は小金稼ぎ程度の、言ってみれば子供のお使いみたいな感じ。もし依頼遂行が成らなくてもそんなに問題にならないやつとか、町の中をパシリよろしく走り回ったりするようなのとか、どこそこのペットが逃げたので捕まえてくださいとか、そういう感じのがここに入る。

中級は初級である程度の実績を積めば受けられるようになる。金払いの良いやつとか、信頼が大切な内容とかが主で、たまに魔法開発の実験台とかもあったりする。

命の危険はないけど、多少の怪我をしたり、依頼を失敗すれば評判に傷がつくこともある。得るものも大きくなるけど、その分責任も増すという――まあそんなの当たり前なんだけど。

そして上級は、中級で実績を積んで、ついでに戦闘的な意味での実力も問題ないと認められたら好きに受けられるようになる。実力が微妙な場合は、受けられる依頼の内容に制限が掛かるらしい。

というのも、上級は大体戦闘が付き物だからだ。町の外での採取から凶暴な獣その他諸々の討伐まで幅広いから、ある程度の戦闘能力がないとやっていけない。

だから、『教会』の管轄区域が町の中だけのリリスの町では、確か上級の依頼が受けられなかったはずだ。『今回』は行ってないから確証はないけど、『シーファ』が何度となく繰り返した『旅』の中ではいつもそうだったんだから、多分今回もそうなんだろう。

今居るレームの町は『教会』の管轄区域が広いから上級の依頼も結構ある。

各級、ピンからキリまであるはずだけど、一体どんな内容にしたんだろう。っていうか本来こんな依頼の受け方って無理だよね。実績積む前に全種類先取りとか。

タキ、『証』持ちだからって無茶やりすぎじゃないだろうか。『教会』が許したんだからいいんだろうけど……。

「……二人、一組？」

つらつらと依頼の分類について『知識』を探ってたら、なんかレアルードが不穏な気配を醸し出してた。……え、また？

「そんな怖い顔すんなって。仕方ないだろ？　団体用の依頼がしばらくないってんだから」

「……」

軽い調子で補足したタキを無言で見つめるレアルード――というかこれは明らかに睨んでるよね。一応仲間なんですがなんでそんな鋭い目をするのかな。
最近はちょっと打ち解けてきたんじゃない？　って感じだったのに逆戻りですかっていうレベル。正直威圧感がヤバいです。

「内容からしてそんなに長くはかからないはずよ。せいぜい半日から一日ってところかしら。申し訳ないけれど、こちらの方で組み合わせは決めさせてもらったわ。早く中級認定をってことだったから、補助――もとい監視として片方には私が付くことになってるの。もう一方はタキを媒体として『心眼』で監視してもらうことになったから。ちなみにこれは決定事項だから、そんなに殺気立ったって覆らないわよ」

……わあ、ネルすごい。説明の間にだんだん威圧が高まってそれどころか殺気によく似たものがレアルードから発され始めたんだけど全く動じてない。それどころか余裕の微笑みすら浮かべてる。
さすが『使徒』。いや『使徒』がどうこうっていうよりネルだからか……。

とりあえず一つ溜息を吐いて、レアルードに視線を向けた。

「レアルード」

ぴくり、と反応して不穏な気配を消したレアルードは、でもまだ

なんか不満そうだ。……駄々っ子じゃないんだから。

「提示された内容は、私達にも利があることだ。感謝をすればこそ、文句を言う筋合いはないだろう」

「……だが、」

「別れるのは初級の依頼をこなす間だけだろう。心配しなくとも、怪我をするようなことはないだろうし――」

そこまで言って、ちらりと見た依頼の内容を思い返す。

……うん、まあ怪我はしないだろう。初級の依頼なんだし。多分。

「――それより、そちらの方が心配だ。こちらには経験者のタキが居るが、レアルード達の方は違うだろう。ネルが付くと言っても、依頼内容には関わらないのだろうし」

「まあ、そうね。どうしてもって言うなら助言くらいはしてもいいけれど」

……頼めば助言はしてくれるんだ。まさかのサービス。あとで頼んでおこうかな。

「こんな破格の待遇をしてくれるんだ。有難いことだろう。だから――」

「――……分かった」

これ以上どう言い募ろうかと悩み始めたところで、レアルードがぽつりと呟くように言った。

……よ、よかった、折れてくれた。過保護癖再びとかになったらどうしようかと。

「だが、……無理は、しないでくれ」

……えーと、そんな沈痛な面持ちで言われても。たかが初級だし。命の危険のあるダンジョンに行きますとかじゃないんだから。

とか茶化せる雰囲気でもないしそもそも『シーファ』はそういう性格じゃないので、苦笑しつつ頷くに留める。

「……さて、それじゃ続きいいか？　とっとと説明終わって依頼に向かった方が良いだろ？」

タイミングを窺ってたらしいタキの言葉に頷いて、タキとネルによる詳しい内容説明に耳を傾けることにした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5674w/

異世界チェンジリング

2011年11月29日01時53分発行